



うつせみのあなたに
短文集 その4

星野廉



目次

「AとB」での主役は「と」なのです *	3
夢を真似て夢を見る *	9
言葉を前にして人は奴隷と下僕になるしかない *	15
直線で切り取り分ける *	23
「谷崎」も「川端」も「乱歩」も、「言葉」であり「記号」なのです *	29
アンチ・アンチ *	35
自分を真似る、自分に似せる *	41
言葉をいじる *	47
夢は第二の現実 *	61
適度にままならない *	69
まだらであることの、もどかしさと、ままならさについて *	77
お代理さまたちのひな壇 *	91
じつは、かけていない	

*	97
ありえない文章	
*	103
用言体	
*	111
girl であり woman であり Melody である	
*	119
あいまいでやさしい境	
*	125
書いた言葉はどこに行く	
*	131
正方形と長方形で悩む夜	
*	137
あやしい動きをするもの	
*	143
ぜんぶ、わたしにまかせなさい	
*	149
2人のゲンちゃん	
*	153
あえて「何か」を決める、あえて「何か」を決めない	
*	159
3人のゲンちゃん	
*	165
自分の中にある「何か」のために書く	
*	171

「AとB」での主役は「と」なのです

＊

「AとB」と書いてあると、AとBのあいだに何らかの関係を見てしまいます。さもなければ、「と」で結ばれているはずがない気がするからでしょう。

ロミオとジュリエット、ピンクとグレー、『男と女』(Un homme et une femme)、女と男、Ebony and Ivory、存在と無、存在と時間、ハリー・ポッターと賢者の石、蜜蜂と遠雷、北風と太陽、点と線、美女と野獣、老人と海、スクラップ・アンド・ビルド、トムとジェリー

どこかで見聞きしたペアだと、そのペアが何であったかで決まる気がしますが、それでも分からない気がする場合があります。「存在と時間、点と線って、どういう関係かな？」と考えこむ人もいそうです。

私とあなた、猫と犬、山と川、かわいいとうつくしい、砂糖と胡椒、火曜と金曜、歌うと読む、ペンとスマホ、数学と書道、アメリカと平安時代、鍵と砂時計、青と化石、寝台の上の蝙蝠傘と谷間の百合、ジル・ドゥルーズと蓮實重彦

何だかなぞなぞみたいにも、ほのめかしや詩のようにも感じられるものがあります。意味深というやつです。シュールなギャグに感じられるフレーズもありますね。

ところで、思わせぶりな「と」には気をつけましょう。何の関係性も示していない「と」がときどきあります。詩や哲学にありそうな気がします。どちらにも疎いのでよくは知らないのですけど。あと、私の書く文章にもたくさんあります。

＊

関係といっても漠然としていますから、具体的に見てみましょう。

まず反対のようなペアです。

大と小・マクロとミクロ・無限と有限・絶対と相対・SとM・もうとまだ・多いと少ない・ポジティブとネガティブ・白と黒・裏と表

次に、動きや状態に注目しましょう。AとBがどうなのかという話です。

引き寄せ合う・反発し合う・シンクロする・矛盾する・くっ付いたり離れたりする・まじり合う

似ている・同じである・異なっている・結ばれている・からみ合っている・重なる・仲がいい・入れ子構造・表裏一体

ずばり「〇〇関係」だと分かりやすいかもしれません。

相関関係・因果関係・三角関係・ねじれた関係・あやしい関係・くさい関係・不倫関係・主従関係・親戚関係・競合関係・無関係

*

いろいろなAとBの関係が考えられますね。こうした関係は固定していなくて、流動的である場合も想像できます。彼女と彼は、十年前は夫婦ただただけれど、いまは雇い主とアルバイトの関係で、友達同士でもあり、きのうは不倫関係、きょうはきわめて険悪な関係、現時点では重なりあっている、なんてありえますよね。

思うのですが、「AとB」では、AとBは刺身のつまで、「と」こそが主役ではないでしょうか。

ロミオとジュリエット、ピンクとグレー、『男と女』(Un homme et une femme)、女と男、Ebony and Ivory、存在と無、存在と時間、ハリー・ポッターと賢者の石、蜜蜂と遠雷、北風と太陽、点と線、美女と野獣、老人と海、スクラップ・アンド・ビルド、トムとジェリー

たとえば、上のペアでは「と」で結ばれている両者がどんな関係であるかが問題であって、両者は別の両者でもいいわけです。試しに「ロミオとジェリー」としてみましよう。「ロミオとジュリエット」や「トムとジェリー」とは別の関係が生まれました。「ジュリエットとトム」でも同じことが起きるでしょう。

＊

「と」ってすごいじゃないですか。「と」自体には意味はないようであり、二つの言葉を「つなぐ」という働きがあるのです。

「AとB」と書かれれば「と」は刺身のつまみたいに見えます。でも、この「つなぐ」という働きはほかの言葉にはない気がします。

「と」というごく短い言葉によって、関係性が立ちあられるのです。これを奇跡と言わずに何と言えればいいのでしょうか。言葉が魔法に感じられます。

「と」は助詞と呼ばれてもいますね。助手とかアシスタントみたいじゃないですか。大きな働きをしているのにかわいそうだと思います。

声を大にして言いたいです。

「AとB」での主役は「と」なのです、と。

夢を真似て夢を見る

＊

俯瞰とは場所つまり空間だけの話ではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

俯瞰という身振りは、人が初めて水面に「かがみ」こんで自分の姿を見た身振り、そして鏡を作り毎日鏡に見入っているという身振りに重なります。自分を見ているつもり。でもその鏡像と映像は自分ではないのです。

見えているのは自分ではなく自分の影、幻影なのです。人は自分を肉眼で見えることはできません。ここに「見る・見える・見ない・見えない」の原点がある気がします。

個人的な話ですが、自分が見えないことに気づいたり、思いだしたり、意識するのは、鏡を覗きこんだ時以外に、自分が見た夢を思いだす時と、テレビドラマや映画を見ている時です。話を簡単にするために、映画を例に取ります。

＊

映画では主人公を含む登場人物がうつりますが、ある登場人物の視点から見られた場面は以外と少なく、その光景や状況やストーリーを分かりやすくするための位置にカメラが置かれて撮影されている気がします。よく考えると誰の視点から、そのシーンが撮られているのか不明になるのです。

居間でお茶を飲んでいる二人を撮った場面を想像してみてください。カメラは、その二人の視点以外の位置で撮られている場合が多いのではないのでしょうか。高い位置から見下ろしてはいませんが、これは一種の「俯瞰」だと思います。

つまり、その状況を説明するのにふさわしい位置から、「展望」しているというか、全体の様子が分かるような絵になっているのです。現実では、まずありえない絵だとは思いませんか？ 誰が見ているのでしょうか？ どの位置から描いているのでしょうか？

＊

ひょっとして、映画の視点は夢を真似たのではないのでしょうか。夢の中では、しばしば自分の姿が出てきます。現実の自分にそっくりな自分もいれば、別人を演じている自分もいたりします。自分が動物とか物になっていたのではないかなんて、目覚めてから考えこむ不思議な夢もあります。あくまでも個人的な印象なのですけど。

映画が発明され、映画の二代目みたいなテレビが発明され、いまではネット上で動画が閲覧できる時代に住んでいる私たちは、映画やテレビや動画（ゲームも含みます）に似た夢を見ていることは十分に考えられます。昨夜、ゲームをやっている、あるいは自分がゲームの中にいる夢を見た人はいませんか？

人は夢を真似て映画の撮影術を発達させ、より精緻で洗練されたものにしてきた。それと並行する形で、映画を真似て夢を見るようにもなってきた。そんな気がします。人は意識的あるいは無意識に自分に似たものをつくり、そのうちに自分のつくったものに似てくるのではないかとよく思うのですが、映画もそうかもしれません。

＊

映画以前に歌があり、お芝居があり、映画と並んでラジオが出てきて、テレビが普及し、テレビゲームが発明され、いまではPCゲーム、インターネット、YouTube、VRが共存する時代になっている。自分の知覚に合わせて何かをつくり、そのつくったものに知覚を合わせていく。

まるで鏡の前の人ですね。鏡を見ながら自分の振りをつくっていく人の身振りを想像しないではいられません。それが夢を見ている自分に重なり、軽い目まいを覚えてきました。

ひょっとすると、私たちは夢を真似て夢を見ているのかもしれませんが。突拍子もない空想ですが、夢の中なら起きる気がします。夢では何でも肯定されますから。

言葉を前にして人は奴隷と下僕になるしかない

＊

突然不躰な質問をしますがお許してください。あなたはSですか、それともMですか？
この質問を例のSMの意味でとってください、けっこうです。どうでしょう？

ジル・ドゥルーズという人の書いた『マゾッホとサド』（蓮實重彦訳・晶文社）という本があるのですが、その内容や詳細はすっかり忘れちゃった。で、要約すると、「いわゆるSとMとは反意語でない」ということが書かれていたと記憶しています。

どうということかと申しますと、Mはかまってちゃんであり、めちゃくちゃめんどくさい、これに尽きるようなのです。

＊

Aの振りをして実はBだったり、Cを求めながらDをほしい振りをしたり、それを相手が察してくれなかったり忖度してくれないと、大変なことになります。ひっくり返って駄々をこねる。切れてすごむ。すねまくる――。

めんどくさいですよ。あなたはそんな人の相手ができますか？　普通はご免ですよ。

大切な点は、そういう性格であるMの「お願い」が、縛ってくれだの、叩いてくれだの、罵倒してくれだのなのです。それでいて、そのお願いにうまく、つまりMの望むがままに応えるものでないと、切れるんです。「お願い」に見えて、実は「指示」であり「命令」なのです。めんどくせーっと思っているあなた、正解です。

こうしたMの資質はざる賢くしたたかとも言えそうです。相手が下手くそだと根気よく教育するのです。しつこいですね。ねちっこいですね。とてもじゃないですが、持久力も戦略も狡知も持ち合わせていないSには太刀打ちできません。

そもそもSとMのあいだには相性など成立しないほど、両者は隔たっているし異質な存在同士なのです。「ねえねえ、こうやってくれる？」と相手を根気よく飼い慣らし操り翻弄するM。その相手ができるのは、たとえMでなくてもMの世界の住人でなければなりません。

＊

＊Mの世界：

基本は、教育と演技（演劇・振りをする）と遊戯。要するに、プレイ。

Mはどんな人？：

教育者（自分が気持ち良くなるためのストーリーと方法を相手に教える教師）。しつこい、根気強い。かまってちゃん。自己中だけど、快感を得るためなら少々のは我慢する。言っていることと望むことがしばしば真逆（たとえば、「駄目」は「OK」、「やめて」は「続けて」、「死にそう」は「めっちゃ気持ちいい」）。主導権は自分が握る。要するに、めんどくさい。最も重要なポイントは、Mはじつは「ご主人」であること。

Mの相手には、どんな人物が適するの？：

従順。元気で健康体であることが望まれる。Mのお願いや注文（実は命令と指示）に根気よく従う良き生徒。要するに、Mの奴隷。必然的にMの協力者や「共犯者」に仕立てあげられてしまう。なお、Mの相手をMがするという状況は珍しくない。

Mの相手に最も向かないのは？：

S。

＊

＊Sの世界：

基本は暴力。しかも一方向（一方的）。要するに、攻撃。

Sはどんな人？ :

自己中で相手に有無を言わせない。忍耐強くない。快感を得るためのストーリーはなく、計画性は希薄で衝動的。ある意味、単純。主導権という観念すらない。とは言え、もちろん、知性や知力とは必ずしも関係があるわけではない。

Sの相手には、どんな人物が適するのか？ :

従順。元気で健康である必要はない。相手が人間であることは言うまでもないが、極端な場合には相手は物（比喩）でもいい（たとえば、相手は比喩的な意味での切断された四肢であったり、比喩的な意味での死体であったりしてもいい）。なお、被害者や犠牲者になる可能性が高い。したがって、Sの行為は犯罪との親和性が高いと言えよう。

Sの相手に最も向かないのは？ :

M。

*

お分かりになったでしょうか。SとMは別の世界の住人なのです。世界観が異なるとも言えるかもしれません。さらに図式化してみます。

*通念：サディストとマゾヒスト、主人と下僕が相反するペアだと考える。

Sadist

Masochist

Master（主人）

Servant（下僕）

上の図式を見ると、SMではなくむしろMSどす。

SMというよりもMSではないか。マスターとサーバントです。そんなふうに思えてきます。

*Mから見た関係=Mの世界

Masochist = Master = 自分

Servant（下僕） = 相手

* Sから見た関係 = Sの世界

Sadist = Master = 自分

Servant (下僕) = 相手

ご覧のように、Mの世界には Servant (下僕) はいいても、Sadist の入る余地はないのです。一方、Sの世界には Servant (下僕) はいいても、Masochist の入る余地はないのです。

*

Aの振りをして実はBだったり、Cを求めながらDをほしい振りをしたり、それを相手が察してくれなかったり忖度してくれないと、大変なことになります。ひっくり返って駄々をこねる。切れてすごむ。すねまくる――。

しつこくて申し訳ありません。ただいま繰り返した、以上の文章なのですが、何かに似ていませんか？ 言葉です。言葉ほど M の資質を備えているものはこの世にないと思っています。とはいえ、言葉のせいではありません。言葉は人がつくった鏡なのです。鏡の国、そして不思議の国に住んでいる人。したがって、こういう状況を自業自得とも言います。

そうなのです。言語活動をいとなむ人間は M の世界に生きているとも言えそうです。それを看破したジル・ドゥルーズはすごいです。特に『意味の論理学』のドゥルーズです。

なんで人はMの世界に生きるようになったのかですが、簡単に事情を説明するところになります。

人は「○△X」という言葉をつくり、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである。

こんなことをしているから自業自得なのです。

音であり文字でしかない、つまりきわめて抽象的な存在でもあり、言い換えると「外からやって来ている」言葉に、意味やイメージをになわせているのは、人なのです。勝手に揺らぎ移りかわっているのも人なのです。言葉は鏡。鏡に罪はありません。

＊

言葉はめんどくさい。言葉の奴隷にはなりたくない。けど、なるのが人間。言葉を文字通りに取ると馬鹿を見る。辞書や文法書や文章読本や用字用語集や学術書に書いてない動きと表情をするのが言葉。言葉は不実でとりとめがない記号。言葉はうつろいつづける虚ろな記号。

言葉のしっぺ返しは恐ろしい。常にダイレクトでリアル、ときにフェイタル。戦争にもなる。大災害にも通じる。言葉には音と文字の他に実体がないのに。人は「ないもの」に踊らされている。実は主導権は人間の側にはない。実質的な最高権力「者」は実体のない言葉。

実体のない言葉を前にして、人間は奴隷と下僕になるしかない。言語活動はSMプレイ。「プレイ」、ここが大切です。遊戯であり競技であり演劇なのです。人は（弄ばれるという意味で）遊び戯れ、技（芸）を競い、劇（お芝居）を演じるしかない。

直線で切り取り分ける

＊

深夜の寝際のとりとめのない思いの記憶を早朝につづっています。

＊

外に出て、海、山、川、草、木に目をやると意外と長方形や四角がないのに気づきます。長方形が見えるなあと思うと、たいてい人がつくったものなのです。そして、そうしたのものには角があるのです。当たり前ですね。

真っ暗な山中の道路で人家を見ると四角い形をした光を目にしてほっとすることがあります。窓が四角いのです。その窓が人の目に見えて、その目を中心にして人の顔が浮かびあがってくるような気持ちになることもあります。そこには表情があります。

四角や長方形は人の印であり、そこに人がいる、いた、いるだろうという印なのです。一方、人体はどうかというと、あまり四角い部分が目につきません。長方形も感じません。角（かく・かど）も直線もないのです。曲線、いびつな形、丸みを帯びた角が目につきます。

人は自分に似たものや自分の中にあるものに似たものを無意識につくっているのではないか。つくっているうちに自分のつくったものに無意識に自分を似せ、それに似てくる。そう考えることがあるのですが、長方形や四角については、どうやらそうでもなさそうに思えてきました。

眠れない夜に考えるのにふさわしい、荒唐無稽な話だと思います。

＊

そういえば、空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがありません。直線もない。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

そもそも四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具をもちいるしかない気がします。結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形ではないでしょうか。

要するに不自然なのです。人の五感で感知できる限りでの自然に反しているともいえそうです。反自然、不自然。ありえない、抽象、観念。そういうものには整然とした美しさがあるのでしょうか。端正なのです。

○角形という幾何学を思い出します。苦手な分野でした。いまも近づきたくありません。頭の中でイメージとして転がすのなら面白そうです。幾何学というと、ナイル川とか揚子江やインダス川をイメージするのは、河口での灌漑とかなんとかがらみの連想でしょう。

測量をしているさまが頭に浮かんできます。紐や縄をつかって直線をつくっている様子も浮かんできます。何を測っているのでしょうか。長さや面積でしょうね。なぜ測るのでしょうか。分けるためにちがいはありません。耕地です。

農作物をつくらないと食べていけません。そのまえに土地を分ける必要がある。わたしの土地、おまえの土地、というわけですね。きちんと分けないと喧嘩や争いが起きます。直線で分割することで、測りやすくなるなんて理屈を幾何で習った記憶があります。偽の記憶かもしれませんが。

*

切り分けたのでしょうか。切るためには直線が必要です。刃物は直線部分があります。ぴんと張った細い紐でも切れますね、糸鋸を思い出します。ぴんと張った糸でお豆腐か羊羹かなにかを押し切っている様子をテレビで見た記憶があります。

手術でもある部分に糸を巻いて両方から引っばって切断していたような気がします。柔らかくて小さくて脆い部分なのでしょう。高度の器用さと熟練を要するようです。メスはおもに皮膚や脂肪や肉を切るのでしょうか。

縄張りを思い出します。縄を張って直線をつくり、こっちはわたしのものとか「うち」、あっちはおまえのものとか「よそ」と決めるイメージです。張る、切る、分ける。張り切って分けていたのでしょうね。納得できました。これで眠れそうです。

分ける、切る。やっぱり、これは人の中にあるのでしょうか。欲求とか欲望のことです。それが直線や長方形や四角という形として、人から出てくる、というか人がつくる。直線や角があるものは、人がいるという印なのです。自然界にはあまりない。人は反自然であり不自然ですから。

だから、夜に暗い中に煌々と輝く長方形に切り取られたまぼゆいコンビニのウィンドウを見て、安心するのでしょうかね。ああ、あそこに行けば、人がいて、四角い容器に入った食べ物がいっぱい並んでいる、なんて。いいですね。ほっとします。これで眠れそうです。

「谷崎」も「川端」も「乱歩」も、「言葉」であり
「記号」なのです

＊

＊Mの世界：

基本は、教育と演技（演劇・振りをする）と遊戯。要するに、プレイ。

Mはどんな人？：

教育者（自分が気持ち良くなるためのストーリーと方法を相手に教える教師）。しつこい、根気強い。かまってちゃん。自己中だけど、快感を得るためなら少々のは我慢する。言っていることと望むことがしばしば真逆（たとえば、「駄目」は「OK」、「やめて」は「続けて」、「死にそう」は「めっちゃ気持ちいい」）。主導権は自分が握る。要するに、めんどくさい。最も重要なポイントは、Mはじつは「ご主人」であること。

Mの相手には、どんな人物が適するのか？：

従順。元気で健康体であることが望まれる。Mのお願いや注文（実は命令と指示）に根気よく従う良き生徒。要するに、Mの奴隷。必然的にMの協力者や「共犯者」に仕立てあげられてしまう。なお、Mの相手をMがするという状況は珍しくない。

Mの相手に最も向かないのは？：

S。

＊Sの世界：

基本は暴力。しかも一方向（一方的）。要するに、攻撃。

Sはどんな人？：

自己中で相手に有無を言わせない。忍耐強くない。快感を得るためのストーリーはなく、計画性は希薄で衝動的。ある意味、単純。主導権という観念すらない。とは言え、もちろん、知性や知力とは必ずしも関係があるわけではない。

Sの相手には、どんな人物が適するのか？：

従順。元気で健康である必要はない。相手が人間であることは言うまでもないが、極端な場合には相手は物（比喻）でもいい（たとえば、相手は比喻的な意味での切断された四肢であったり、比喻的な意味での死体であったりしてもいい）。なお、被害者や犠牲者になる可能性が高い。したがって、Sの行為は犯罪との親和性が高いと言えよう。

Sの相手に最も向かないのは？：

M。

*SとMとH

以上の説明から、「SとM」とか「SM」と一般に呼ばれている言葉やそれにまつわるイメージや思い込みの粗雑さがお分かりになったと思います。

なお、以上の図式が図式である以上粗雑で杜撰なイメージと思い込みであることは言うまでもありません。正しい視点などでは毛頭ないという意味です。そもそもメタな視座などあり得ないのです。

*

ところで、みなさんもお感じになるでしょうが、谷崎潤一郎はMですね。健康かつ元気でかまってちゃんな女性に振り回されるのを喜んでいます。たとえば『痴人の愛』や『鍵』や『瘋癲老人日記』を読むとよく分かります。

一方、川端康成はSだという気がします。かなり自己中で強引で有無を言わせないところがありますよね（『みづうみ（みづうみ）』ではストーカーまでします）。しかも、『禽獣』のように相手が「か弱すぎ」たり（相手が人間とは限りません）、『片腕』のように相手は切断された腕と手であって、いわば物ですが、これは幻想であり暗喩または換喩と解すべきでしょう、あるいは『眠れる美女』のように眠っている（ある意味死体や物と同じです）場合もあるのですから、怖い、怖すぎます。

江戸川乱歩はたぶんかなり偏ったMでしょう。Mというだけでは済まされないという意味です。乱歩は変化球をばんばん投げましたよね。奇想とも言います。これでもかこれでもかという具合に。あれはすごいです。Mというより、M寄りのH（辞書に載っているHという意味です）というべきかもしれません。

私がすごいと思って何度も読み返したのは、短編では『人間椅子』と『鏡地獄』と『芋虫』、長編では何と言っても『孤島の鬼』（とりわけ秀ちゃんと吉ちゃんが出てくる部分の妖しさと悲しさ）です。

乱歩の作品は、谷崎と同様にその主要なものが青空文庫に入っているので、まずはネットで目を通してから本を読むのもいいかもしれません。「いやだ、こんなの無理みたい」とお感じになれば、バイバイということです。

*** 「谷崎」も「川端」も「乱歩」も、「言葉」であり「記号」なのです**

ここで大切なことを言います。

谷崎も川端も乱歩も、MだのSだのHだのも、その作品の傾向についての話なのです。ご本人については知りませんので、誤解なきようお願いいたします。作品だけを前にして、その作品を書いた人について語るわけがありません。騙るなら別ですけど。

つまり、「谷崎潤一郎」も「川端康成」も「江戸川乱歩」も、「言葉」であり「記号」なのです。それでしかありえないのです。あなたと私で考えてみると分かりやすいと思います。はてなブログという場にいる限りにおいては、あなたも私も生身の人間ではないわけです。

私はあなたに触れることはできません。でも、ディスプレイ上のあなたの言葉（文字）になら「触れる」ことができます。それ以上でもそれ以下でもありません。

あなたも私も言葉であり文字であり記号。谷崎潤一郎も川端康成も江戸川乱歩も、言葉であり文字であり記号なのです

いま、私たちはめちゃくちゃリアルな話をしています。スーパーリアル、超現実主義、超写真主義、超自然主義、超絶悶絶レアリスム、シュールレアリスム。

私は谷崎潤一郎にも川端康成にも江戸川乱歩にも会ったことはありません。触ったこともありません。あなたにも会ったことはありません。触ったこともありません。言葉、文字、記号を介して知っていたり、やり取りをするなら言葉・文字・記号しかないのです。

それ以上でもそれ以下でもありません。それ以上とそれ以下についてこだわるのが文学であり批評であり読書なのかもしれません。

アンチ・アンチ

＊

「SとM」と書くと両者のあいだに反対の関係を見ることが多いように、「AとB」というぐあいに「と」でつながれたもの同士を反意語とみなすのが一種の紋切り型になっている気がします。

以下は「AとB」というふうには、よくペアとして口にされたり文字にされる二つの言葉についての個人的な意見および感想を述べたものです。長いので、読むというよりも、ざっと目を通していただただけでかまいません。太文字のところだけを流し読みしていただくのもいいと思います。

(1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。写真のネガとポジが代表的な例。

AからBへ、BからAへの移行が、ほぼ瞬間的に可能であるという特徴を持つ。また「一瞬にして自分を変える」「ポジティブをネガティブに転じる」に類似した、ある種の分野で用いられているレトリックもある。この中に含めてよさそうなペアの候補としては、愛と憎、快と不快、「いや＝だめ」と「ええ・はい＝いいわ・いいよ」、幸と不幸、うれピーとかなピー、味方と敵、友達と見知らぬ人、痴漢とたまたま電車内で隣合わせた人、前進と後退、後ろからと前から、進化と退化、などが怪しい。

(2) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「範囲語」であるらしい。

AとBの意味の素（もと）は、かなり混じりあっているにもかかわらず、言葉の響きによって、反対の意味であるという印象を招いていると推測される。つまり、構成要素が同じ「範囲＝枠」の中で入り乱れている。構造的には、連続体という比喻も有効であろう。また、時間的推移により、構成要素間での位置関係が変化しやすい。また、そもそもペアが反意であるという根拠が薄い場合も、ここに含めていいと考えられる。変化に注目した場合には、プリズムのイメージが近い。見方や視点を変えると、異なったもののように知覚されるという特徴がある。正規品と類似品、オトナとコドモ、単数と複数、先生と生徒、悪人と善人、聖人と流神（とくしん）者、聖人と俗人、超人とふつーの人、親と子、日本銀行と子ども銀行、本店の味と支店の味、すごい人と凡人、本物と偽物、本人と影武者、作者とゴーストライター、作家と編集者、本人と偽者、教科書と参考書、

学校と予備校、天動説と地動説、「ヒトは空を飛べる」と「ヒトは空を飛べない」、幽霊の存在の肯定と幽霊の存在の否定、「(人間関係における)上」と「(人間関係における)下」、などが典型例かもしれない。この中に含めてよさそうな他のペアの候補としては、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、ハレとケ、「本当です」と「間違えました」、「本気で」と「冗談です」、飴と鞭、などが怪しい。

(3) AとBは、「反対語」というよりも、むしろ「相対語」であるらしい。

AとBの間には、反対関係ではなく、相対的な位相が存在すると推察される。したがって、その階段のどこにいるかによって、反対関係とは言えない関係が生じる。多くの場合、測定器や測定用機器によって物理的に観察でき、かつまた数値化可能だという特徴を備えている。以下の典型例は、比喩としてではなく、物理的に確認可能な場合を想定していることに注意されたい。熱いと冷たい、暑いと寒い、右と左、無痛と苦痛（※S Mではなく医学的意味で）、厚いと薄い、高いと低い、長いと短い、遠いと近い、SサイズとMサイズ、「でかい」と「ちっちゃい」、「これだけ」と「こんなに」、「あんだけ」と「こんだけ」、東洋と西洋、速いと遅い、すっぴんと厚化粧、など。

(4) AとBは、「対義語」というよりも、むしろ「大儀語」であるらしい。

AとBの間に、対立関係ないし反対関係を見出すことは容易に見えて、実は難しい。哲学、論理学、倫理学、数学、ひいては言葉遊びやレトリックのテーマとして、しばしば論じられてきたが、結論は出なかったもよう。これから先も、結論は出ないと予想される。この種の議論は、七面倒くさく、骨がおれ、徒労に終わることが特徴。一部のマニアおよびオタク向け。脳科学に救いを求める向きもあるが、その有効性は絶望的。典型例は、存在と無、時間と空間、有と無、虚と実、戦争と平和、現実と非現実、SとM、現実と仮想現実、フィクションとノンフィクション、正常と異常、事実と虚構、嘘と真（まこと）、愛と誠（まこと）、沢田みかと沢田まこと、始まりと終わり、正気と狂気、事実と意見、身体と精神、平面と局面、点と線、直線と曲線、罪と罰、天国と地獄、真実と解釈、この世とあの世、オトコとオンナ、キミたち女の子とボクたち男の子（※ただし、ここではオスとメスという生物学的要素を除いた抽象語）、など。

(5) AとBは、「対義語」といよりも、むしろ「大疑語」であるらしい。

大いに主観的な解釈が、さまざまな人たちによってなされている、大いに疑わしい上に、いかがわしいペアである。と解釈できる点が、疑わしさといかがわしさに輪をかけていると言えなくもない。(1)(2)(3)(4)、および次の(6)と重複する。典型例は、幸と不幸、前進と後退、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、虚と実、SとM、現実と非現実、嘘と真（まこと）、愛と誠（まこと）、早熟と赤ちゃん返り、こむら返りととんぼ返り、などが大いに疑わしい。

(6) AとBは、「異義語」というよりも、むしろ「異議語」であるらしい(※両者の漢字の違いをよく見ていただきたい、異議申し立ての異議)。

反対関係にあるのではなく、複数の利害関係者間の意見の相違や虚偽や策謀などが根底として存在する混乱や喧嘩であると推測される。悪態や罵倒で表現されるのが特徴。利害関係に基づくものであるために、しばしば同一ないし同様の表現として立ち現れる。例は以下の通り。「言った」と「言っていない」、「やったろー」と「やってねー」、「良かった」と「悪かった」、「関係ねー」と「責任とれ」、「おまえが悪い」と「おまえが悪い」、「失礼しちゃうわ」と「失礼しちゃうわ」、「とんでもないわ〜」と「とんでもないわ〜」、「おだまり」と「おだまり」、「ケチ」と「ケチ」、「ドケチ」と「ドケチ」、「馬鹿野郎」と「馬鹿野郎」、「あんたが言うな」と「おまえに言われたくない」、「今に見ている」と「今に見ている」、「真似すんな」と「真似すんな」、「馬鹿」と「アホ」、「おこ」と「おこ」、「激おこぶんぶん丸」と「激おこぶんぶん丸」、「冗談は顔だけにしろ」と「冗談はよしこさん」、など。

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

世界を「まだら」状にしか知覚および認識できない人間が、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると事実誤認および錯覚されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、知覚と錯覚、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、「記憶にございません」と「存じ上げております」、きれいと汚い、毒と薬、可能と不可能、シャチョーとペーパー、はじめしゃちょーと林家ペー(※両者とも人間という意味)、林家ペーと林家パー子、お偉いさんと市民、苦勞人と元苦勞人、玄人と素人、素人のど自慢と紅白歌合戦、濃いと薄い、あそこここ、善と悪(倫理的意味ではなく、この惑星に対しての人間の影響度)、神と悪魔(諸説あり)、異端と正統、温水と冷水、ヒトと動物、なまものといきもの、のろいとまじない(漢字にすると同じである点に留意されたい)、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、など。

(8) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「別物」であるらしい。

しかし、存在である以上、根本においては、つながっているとも推測される。ベクトルが違うのに、歴史的経緯、争い、錯覚、勘違い、事実誤認、陰謀によって、反対の関係があるとみなされているとおぼしきペア。典型例は、資本主義と共産主義、塩と砂糖、社会主義と共産主義、ウサギとカメ、SとM、毒味と薬味、白ペンキと黒ペンキ、〇〇教と△△教、〇〇派と△△派、〇〇流と△△流、一時期のテレビと一時期のラジオ、鏡の中と鏡の外、北京と南京、東京と西京、大山くんと小山くん、ロミオとジュリエット、少年時代

と少女時代、少女雑誌と少年雑誌、婦人服と紳士服、子供服と大人服、シロとクロ、黒子と白子、北酒場と南酒場、東武と西武、年末と年始、まなとかな、タロとジロ、など。

*

こうやって眺めていると、私はどうやらアンチ反意語派みたいですね。アンチ・アンチという感じでしょうか。平和主義者と同意語と考えていただければ幸いです。ですので、別に反意語に恨みはなく、すべての言葉が愛おしいのです。苦手なことは確かですけど。あと、反意語の同意語は同意語ではないかなんて、このところよく考えます。

自分を真似る、自分に似せる

＊

みなさんは、「似ている」に対してどんな思いをいただいていますか？

この人はあの人に似ている。あなたは、〇〇さんに似ていますね。この小説はあの小説に似ていると思いませんか？ Aの作る曲ってBの曲に似ているような気がしてならない。彼女の見せるちょっとした仕草が、彼女のお母さんに激似。

この絵とあの絵はそっくりだ。うちの息子の後ろ姿に旦那を見てぎょっとした。「ねえ、これって手触りがあれに似てない？」「どれどれ。いやだ、本当……。触ってみると、あれにそっくり」あの人のお父さんの服装とか話し方を見ていると歌手のBさんをかなり意識している気がする。

ここから見る風景は、故郷の町を彷彿とさせる。この店の餃子を食べるたびに、おばあちゃんの作ってくれた餃子を思い出すんだ。電話に出たのがお母さんだと思ったらお姉ちゃんだった。この記事って、きのうS新聞で読んだコラムにとっても似ているんだけど。

何かと何か、あるいは誰かと誰かが似ているという評価や印象が、人を喜ばせることもあれば、怒らせることもありそうですね。笑いや驚きやため息や涙をもたらすことも考えられます。また、「似ている」が人と動物だったり人と物の場合もあるでしょう。

私は「似ている」大好き人間なのですが、手放しで「似ている」を賞賛していいとは思っていません。「似ている」は一つの評価にはちがいないのですが、「同じ」や「同一」と違って検証ができません。「似ている」は印象だからです。印象や感想は偏見につながりますね。それが「似ている」の恐ろしいところでもあります。

「似ている」という評価や意見がさまざまな感情を人にいだかせることに敏感でありたいと思っています。

＊

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

あ、これ、〇〇の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにもXXさんの脚本ばいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。

自分を真似る。自分に似せる。自分を模倣しつづけることは、随時更新することだとも言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

＊

自分であると思いきこんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいるはずですが、自分を眺めることが他者を認めることでないと誰が断言できるのでしょうか。鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと思います。自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。鏡に映っているものは「似たもの」なのです。「何か」そのものではありません。

何かに似ているのです。その何かが何なのは分からない。ひょっとすると、鏡（この鏡を比喻と取っていただいてかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、で

す)に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。

影やまぼろしが自立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもてあそばれていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。私には生きているように思えてならないのです。影とまぼろしを、幻影と書いてみると分かりやすいかもしれません。

言葉をいじる

＊

言葉を転がす

このところ寝際によく頭に浮かぶのは、書いてみる、書いておく、書いてやる、書いていく……というような言葉の変化なのですが、こういうのは何というのでしょうか？

活用という言葉がありますが、それとも違う気がします。広義の語形変化とでもいうのでしょうか。文法が苦手なのでわかりません。

しあう、してみる、していく、してくる、しておく、してやる、するようになる、なんて具合に頭の中でとなえるのですが、別に暗唱しているわけではなく、とりとめなく変化させているので、「言葉を転がしている」感じがします。

もっとやってみましょう。言葉をどんどん転がしてみます。

やってみる、やってみていく、やってみてやろう、してやりたい、しておきたい、しておきたいだろう、してやりたいかもしれない、してやりたいかもしれないけど、してやりたいかもしれないけどね、してやりたいかもしれないけどさ。

どれひとつとして同じものはありません。少なくとも私にとって、それぞれが違ってきます。このように言葉をいじった結果として生じる、ずれが楽しいしわくわくするのです。やめられそうにありません。

違います。違うんです。違うにちがいない。違うはずなのだ。違うかもしれない。違っていたりして。違う気もしないこともなきにしもあらずなんちゃって。

「有りのままの事実を書いて見ようと思います」

”私はこれから、あまり世間に類例がないだろうと思われる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざっくばらんに、有りのままの事実を書いて見ようと思います。”

(谷崎潤一郎『痴人の愛』から引用)

書いてみるは「書いて見る」というように書かれていた時代があるようです。夏目漱石の小説では「〇〇してみる」とも「〇〇して見る」とも表記されていた記憶があります。

こういうふうに漢字をあててみると話はずっと面白くなりますが、寝際のうとうとした状態で文字という視覚的なイメージにかかると、目がさえてしまって眠れなくなる恐れがあります。

とりわけ漢字は脳の覚醒をうながす文字だという気がします。

書いておく、書いて置く、書いて措く、書いて擱く、書き置き。書いていく、書いて行く、書いて往く、書いて逝く。

最近気がかりなことがあって「書いておく」とか「書いておきたい」が頭から去らないので、記事を書いて言葉いじりをしてみました。

書いておかない
書いておきます
書いておくとき 書いておく
書いておけば 書いておけ
書いておこう

いや書いておこうなんて言わない。
遺す思いがあれば何かが残る。
そう信じて書こう。書いておくのではなく書いていくのだ。

*

言葉をいじっているうちに思いが上向きました（まだ十分に回復してはいませんが、このところ気が滅入ってならないのです）。有り難いことです。ままたらぬ現実の中で生きていこうという気持ちになりました。言葉に感謝しています。

言葉をいじる

書く、書かない、書きます、書く（とき）、書く、書けば、書け、書こう、というふう
に言葉が変化するのは不思議ですね。「なんで？」なんて考えてしまいますが、答えは出
そうもないので、「なんで？」を宙づりにして生きていくしかなさそうです。

いずれにせよ、こんなふうに「書く」をいじることで意味やニュアンスやイメージが
変わるのですから、面白いです。

別のいじり方もありそうです。

「あ、鳥が空を飛んでる」は、事実を言葉にしていると思われれます。「鳥みたいに飛びた
いなあ」は、望みや願いや祈りを言葉にしているということでしょうか。

「実はわたしは鳥みたいに空を飛べるんだ」は「鳥みたいに」という比喻を使って、かな
いそうもない望みを「事実みたいに」述べているといえるかもしれません。

「わたしは鳥なんだ」も、たとえだと考えれば比喻でしょうね。例の暗喩とか直喩という
やつです。「たとえ」という和語を漢語系の言葉でいうと、もっともらしく見えるし響き
ますね。要注意です。

「実はわたしは鳥みたいに空を飛べるんだ」をちょっといじって「わたしは空を飛べるん
だ」としてみましよう。

もしも「おれ、空を飛べるよ」と誰かが言ったら、あなたはなんて答えますか？ 「うっ
そー！」ですか？ 「アホか？」ですか？ それとも「……」ですか？ 実は私も
空を飛べます。

飛行機に乗ればですけど。

こういうのを強弁とかこじつけとか一種のご飯論法とかいいますが、上で述べた「あ、鳥が空を飛んでる」から「わたしは空を飛べる」への飛躍も、言葉をかなりいじりまくった結果だといえそうです。

言葉は外からやって来る

人はなんで言葉をいじるのでしょうか？

それは、言葉が外からやって来るものだからです。

「うっそー！」「アホか？」「……」ですよね。

説明させてください。

＊

健常であれば、生まれたばかりの人は、まわりの人たちの話すのを聞いて言葉を覚えます。つまり、言葉を外から取り入れます。

言葉は、内から自然に出て来るものではありません。

言葉は外からやって来るだけではありません。言葉は外そのものなのです。

言葉は音声であったり文字であったりします。音声は空気のふるえですが、空気という具体的な「物（物質）」であると同時に「振動（動き）」という抽象的なものでもあるといえるでしょう。一方の文字は、たとえばインクという「物（物質）」であると同時にインクの染みから成る「形という抽象的なもの」でもある、といえそうです。

このように具体と抽象の両面があるのが、言葉なのです。言葉であるかぎり、両者を切り離すことはできません。切り離せば、音声は単なる振動になり、文字は単なる形になりますが、これは抽象的なものですから、信号（抽象的なものです）に置き換えることが可能です。

その抽象（外）に、意味やイメージを与えたり読みこんだりするの、人の思い（内）です。

抽象はそっくりそのまま信号や情報として伝達したり記録したりできますが、これを人が言葉として受けとるためには、音声であればスピーカーや声帯や鼓膜、文字であればインクや液晶や指や目といった具体的な物が必要になります。

物は物質ですから、傷ついたり壊れたり劣化したり腐敗したりしますし、誤作動やノイズや失敗や故障や消滅がつきものです。言葉を使った日常生活を思いうかべるとわかりやすいと思います。物質としての音声や文字はうまく伝わらないし誤作動するし消えます。

いずれにせよ（抽象であれ具体的なものであれ）、言葉は人の外にあり、物という意味での「外」そのものなのです。言葉が「外」であるとは、人体に入れて消化したり吸収できないという意味です。うんちや体液の中に言葉を構成する物は含まれていません。

言葉は外にあるのです。言葉は外にある外でもあります。でも、内に入れることができます。

どういふことなのかといいますと、言葉は内に入ったときには、思いになるのです。言葉が外からやって来て、人の内に入ります。

よく考えてみてください。これはすごいことなのです。外と内がつながるんですよ。しかも、外は単に眺める対象ではなくなり、自分のものになって、それがいじれるような気分になるのです。

ふつうはありえないことが起きているのです。というか、正確に言えば、ありえないことが起きている気持ちになるのです。

言葉は最強の嗜好品

人はなんで言葉をいじるのでしょうか？

たぶん、現実がいじれないから、その代わりに言葉をいじっているのではないでしょうか（言葉は現実の代理なのです）。さらにいうなら、言葉をいじると何とでも言えるからだ（この場合には言葉は必ずしも現実の代理ではありません）と思われま

なにしろ、「わたしは空を飛べる」と言えるんです。「わたしは鳥だ」とも言えます。「太陽は西からのぼる」とも「白は黒だ」とも言えます。「わたしは五百年前のヨーロッパのある村で生まれた女性の生まれ変わりなのです」とか「わたしには百年後の世界が見える」とも言えます。

「そんなのはフェイクニュースだ!」「きれいはきたない、きたないはきれい」「語りえないことについては、人は錯覚するしかない」「ご飯は食べてません。パンは食べましたけど」。

あるいは、「アートは爆発だ」とか「ちょんぼは成功の母」とも言えます。また、「街に雨が降っているように、僕の心にも雨が降っている」とか「山の向こうに幸せが住んでいると人が言っている」とも書けます。現にそれに似たことを誰かが言ったり書いていますね。

すごいじゃありませんか。言葉を使えば何とでも言えるのです。思いの中で——つまり想像や空想や妄想や幻想や幻覚の中で——、「おもう」ことが可能なことを、言葉という「外」（抽象的なものであり同時に具体的な物でもあります）を使って言ったり書いたりできるのです。

思いは実現するなんて言い回し言葉の綾がありますが、思いを実現するのは難しかったり不可能だったりします。でも、思いを言葉にすることなら簡単にできます。

しかも、言葉は物（音声とか文字）ですから、遠く離れたところにいる他人に伝えることも、記録して後世に伝えることもできるのです。それが文化であり文明なのでしょうね。

現実はいじれない。思いはいじれる。言葉はいじれるだけでなく、伝えることができるのです。時空を超えて、です。

脳内物質がどぼどぼ出そうな話ですね。こんな快感を覚えたら、やめられませんよ。何
がって。言葉を使うことです。だから、みんながやっているのです。この私もやってい
ます。まさに、いま、ここで。

言葉は最強の嗜好品であり、さらには最強のドラッグだといってもいいのではないで
しょうか。

言葉、思い、現実

まとめてみましょう。

人は言葉をいじります。いじりまくっています。

このいじるには、話すも書くも、歌うも、聞くも、読むも、含まれます（※聞くとき人
は同時に自分の頭の中で、聞いた言葉を勝手に話しています、読むとき人は同時に自分
の頭の中で、目にした言葉を勝手に書いています、だから誤解やノイズがふつうに生じ
ます、百パーセントの伝達や理解なんてありません、「なんで言葉がこんなに通じないの
だろう?」、「あの人、私の話をぜんぜん聞いていないじゃないか」）。

人は言葉をいじらないではいられないようです。

現実をいじることは難しいし不可能であることが多いです。もちろん、現実を「ある
程度」いじることはできますが、人は「その程度」では満足できない生き物なのです。欲
が深いともいえます。

思いをいじることは簡単です。思い浮かべたり、思い描けばいいのです。思いが勝手
に動くこともあります。思いが暴走することもあります。思いの中では何でも起きます
し起こります。

ちなみに、思いが勝手に動いたり暴走するのは、夢です（あるいは幻想や幻覚も）。ま
まならないという意味では夢は現実に似ているかもしれませんが。夢とは、いわば第二の
現実です。その意味で、夢も外だという気がします。ままならないからこそ、人は夢に
血道をあげるのです。

思いどおりになる夢なんて見てみたいですね。

でも、思いどおりになる夢が見られるのなら現実なんて要らなくなります。現実から逃避して夢の世界に行きたくなるでしょうね。ずっと眠りつづけるという意味です。永眠。

言葉をいじることは簡単です。思いをいじるのに比べれば難しいのですが、それは言葉が外にあり外からやって来る外（物）だからです。

外にあったものですから、それをまさに「思いどおりに」いじるためには学習して操作する練習を積まなければなりません。言葉の操作には、うまい、へたがあるということです。外にあり外そのものである道具という物の使い方に巧拙があるのと同じです。

さらにいうなら、外にあり、外であるつまり物である言葉を手なずけるのは至難の業です。へたをすると、言葉を使うどころか、言葉にもてあそばれます。

*

図式化すると以下のようになります。

現実：外（ままならない）

言葉：外と内（外と内の両面を兼ねそなえた便利なもの）

思い：内（ぐちゃぐちゃ、ままならない）

現実：外にあり、外そのもの（本来は言葉と無関係であり無縁である）である

言葉：外にあり、外そのものであると同時に、外から内に入りこむ

思い：内にある、得体の知れない＝本来は言葉にならないブラックボックス、実は外

言葉は、外である現実と、内である思いとのあいだにある「使者」と考えてもいいでしょう。

外にある、ままならない現実。内であって、ぐちゃぐちゃしてとりとめのない思い。

外からやって来た言葉（物である音声であり文字であるという意味です）は、ぐちゃぐちゃした思いを整理し（人間の内に入りこむのです）、他人に伝達するさいの助けとなり、記録という形で記憶を補ったり保存を可能にし、ままならない現実をいじることができるようにさせてくれるのです。

次のようにもいえるでしょう。

うじうじと思うだけなら、ぐちゃぐちゃやもんもんは一向に解消されませんが、「外にある/外から来た/外である」言葉にすることで、思いは、「外にある/外である」ままならない現実が、なんとかいじれるのではないかというお墨付きを得る。現実なんて、ちょろいもんだと思いきめるわけです。

言葉は思いと現実のあいだにあって、思いと現実をつなぐ架け橋——。このたとえば綺麗すぎますが、言葉の二面性（外であり内である）というニュアンスは伝わると思います。

言葉とは、思いが現実だと、そして現実が思いだと錯覚させる、錯覚製造装置——。これではいささかシニカルすぎますが、言葉の麻薬的性格は伝わる気がします。

言葉を使うと何とでも言えるという例ですね。

めちゃくちゃ気持ちいい

たとえば、自分は空を飛べないという現実を、「空が飛びたい」「鳥のように空が飛びたい」「わたしは鳥だ」「わたしは空が飛べる」と言葉にして、その言葉をさらにさまざまに形にして——「こんなふうになれば、空が飛べる」「これがあれば、空が飛べる」というふうに進歩したり工夫するわけです——いじりつづけてきた人間は、飛行機や宇宙船で空を飛べるようになりました（うさんくさいとか嘘くさい話ですがご勘弁願います、複雑な話をうんと簡単にするとこうなるのです）。

要するに、いじることができない現実を、思いとしていじるだけでなく、言葉でいじることによって、人は自信を得たり、思い（発見や知識や技術も含む）を仲間や後の世代に伝えて、ついには（部分的ではありますが）現実にしたのです。

最初は馬や鹿を見ていて「速いなあ」「あんなふうに走りたい」と思っていた人間は、それを言葉で仲間や次の世代に伝えることによって、馬に乗って（さらには馬車に乗って）走ることができるようになり、ついには馬や鹿よりも速く走れる自動車や列車で移動できるようになったということです（馬鹿みたいに短絡した話で恐縮です）。

空を飛びたいと思うだけなのと、「空を飛びたい」と言葉にするのでは雲泥の差があります。言葉にすることで、伝達と記録が可能になります。「空を飛びたい」を歌（詩歌やスローガンも含みます）にすれば、盛り上がること間違いなしです。本当に空に飛べる気になります。みんなで歌えばこわくなくなります。文字で書けば、さらに現実感を帯びてきます。文字の力は恐ろしいです。

（すごく単純化した話たわごととしか言いようのない馬鹿話をしていますが、思いを言葉にすることで、人はその気になり、頑張るのです。勉強し研究し努力して、知識を身につけ蓄え伝え増やすのです。それが学問や科学技術の進歩なのでしょうが（「苦節三万年、地球の気温を高くしましたおかげさまで月にも行けました」）、個々の進歩の詳細については、勉強不足と力不足なため、ここで触れることができません。）

「人は空を飛べる」とか「私は空を飛びたい」と思っているだけじゃ駄目なのです。声に出して言ってみるとなんだか飛べる気がしてくるし、飛びたいという気持ちが強化されるだけでなく、他人にも伝えることができます。さらに文字にすることで、「飛べる」が現実や事実に思えてきます。「飛びたい」が願望から決意に変わります。

声と文字の力はつよいのです。人を酔わせます。人をその気にさせます。この感情と興奮を覚えるためめっちゃう気持よくなります。多幸感どころか全能感とか有頂天、天にまで行ける気になります。つまり、人は声と文字に依存し嗜癖しているのです。

人は気持よくなるために言葉をいじっているのです。人類というレベルでも、個人の次元でも同じです。このたわごとを書いている私もそうです（「書くことはこんなに苦しいのに……」とおっしゃる方もいらっしゃいますが、快感と苦痛は人においては矛盾しません）。

宗教、芸術、文学、科学、学問といったものを支えているのが、この「めっちゃう気持いい（または苦しいある程度の苦痛は快感と同義）」なのです。

話がずるずると脱線したりあれよあれよと飛躍しましたが（私の文章から脱線と飛躍と重複を取りのぞくと何も残りません）、言葉をいじっていると気持ちがいいので、とまらなくなりました。

この辺で一息入れます。では失礼します。言葉に感謝。私は言葉なしでは生きていきません。

夢は第二の現実

＊

ちなみに、思いが勝手に動いたり暴走するのは、夢です（あるいは幻想や幻覚も）。ま
まならないという意味では夢は現実には似ているかもしれませんが。夢とは、いわば第二の
現実です。その意味で、夢も外だという気がします。ままならないからこそ、人は夢に
血道をあげるのです。

思いどおりになる夢なんて見てみたいですね。

でも、思いどおりになる夢が見られるのなら現実なんて要らなくなります。まさに現
実から逃避して夢の世界に行きたくなるでしょうね。ずっと眠りつづけるという意味で
す。永眠。

(拙文「言葉をいじる」より引用)

＊

私には、いったん投稿した記事をいじりまくるとい癖があります。「言葉をいじる」
という記事もいじりまくってました。上に引用したのが、いじっているうちに書き足
した部分です。

現実ままならない。夢もままならない。それなら、夢は第二の現実だ。そんなふう
に短絡していったわけです。

簡単には結びつかない関係のもの同士をいとも簡単に結びつけることを短絡というよ
うです。要するに、こじつけであり矛盾であり無茶苦茶ではないでしょうか。

言語活動や思考や認識といういとなみの本質をついているような気がしないでもあり
ません。なにしろ、「猫」というものと「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字や音声を結
びつけているくらいですから、人にとっての現実は無茶苦茶です。

現実とは、なぜかそこにあります。有無を言わず、そこに立ちあらわれています。人はわけがわからないままに、そこに放り投げられているのです。

一方で、本来は関係ない者同士が結びついたり、当たり前顔をして立ちあらわれて、踊りまくっているのが夢です。これも、無茶苦茶、滅茶苦茶です。現実には負けないくらい。

何もかもが肯定されて、そこにあり、そこで動いているのが夢。荒唐無稽で、とりとめがない。ただし、荒唐無稽とか無茶苦茶というのは、目が覚めて夢から「うつ」に、つまり現実にもどったときに夢を思いかえしていただく思いです。

夢の中では、それが夢だとは意識しないし（「意識できるよ」とおっしゃるあなたに座布団一枚）、夢批判とか夢批評なんてできません（もちろん、夢分析や夢占いもできません）。

夢は思いどおりになりません。つまり、ままたらない。やっぱり、第二の現実に思えてきます。

＊

話を変えます。

図式化すると以下ようになります。

現実：外（ままたらない）

言葉：外と内（外と内の両面を兼ねそなえた便利なもの）

思い：内（ぐちゃぐちゃ、ままたらない）

現実：外にあり、外そのもの（本来は言葉と無関係であり無縁である）である

言葉：外にあり、外そのものであると同時に、外から内に入りこむ

思い：内にある、得体の知れない＝本来は言葉にならないブラックボックス、実は外

これも「言葉をいじる」からの引用ですが、自分で書いたものとはいえ、あらためて見ると、うさんくさいです。荒唐無稽でもあります。夢を見て書いたとしか思えません。

とはいえ、自分が書いたものはかわいいものです。ちょっとだけ説明させてください。

現実と言葉は人の外にあって、思いどおりにならなくて、物でもある——言葉のうち、音声は空気の振動ですが、空気は物であり、ふるえは抽象です、一方の文字はたとえばインクという物質であり、同時に形という抽象です、音声と文字はどちらも物と抽象の両面を備えています——というのは何となくわかります。

それに加えて、思いが物ではないということまではわかりますが、外であるとはどういうことなのでしょう。これは「たとえ」だと考えましょう。

言葉の綾とも言えるでしょう。レトリックというもっともらしい外来語で呼ぶこともできますが、ここでは言葉の綾と呼びます。

ところで、綾って何でしょう？

辞書で調べると「模様・もよう」という言葉が見えたので、要するに形とか姿とか表情ではないかと感じました。抽象的なものであり、それを知覚するためには物や物質に助けてもらわなければならないということです。

それって、音声や文字のことじゃないですか？

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ猫の話を思い出します。猫が笑って、その笑いだけが残るというお話です。

*

猫という物つまり具象が消えて、笑いという表情つまり抽象が残る——。

ルイス・キャロルって面白い話をとてもリアルに書いた人ですね。私には難しすぎて苦手なのですが、すごい作家だと思います。かなりこみいったややこしいことを子ども向けのお話という形でリアルに書ける人なのですから。

このすごい作家についてすごいことを『意味の論理学』で書いたジル・ドゥルーズもすごい。すごい連続で、ごめんなさい。それくらいすごいんです。

そのすごさを実感するには、『不思議の国のアリス』と『意味の論理学』を読んでいただくのがいちばんだと思います。「なんも言えねー」状態になるか、「すごい」を連発するしかありません。個人の感想です。

言葉の綾の綾とは、模様のこと、模様とは具象と抽象を兼ねそなえているという意味で、音声や文字とそっくりである。音声と文字は言葉である。したがって、言葉の綾の綾とは言葉とそっくりである。つまり、模様は言葉とそっくりである。

言葉の綾とは言葉の言葉ということになりそうですが、不思議の国に迷いこみそうなので、ここでストップします。

＊

わかったようなわからないような話ですね。ある意味もどかしいです。ままならなさを感じます。でも、それでいいのではないかとも思います。言葉の綾を文字通りにとって本気にすると馬鹿を見るという意味です。

これは『不思議の国のアリス』を読むと、体感的に実感できます。『意味の論理学』を読むと、頭で理解できます。

とはいうものの、模様は言葉とそっくりであるというのは、かなり言えている気がします。

模様を、笑いのような表情とか、あるいは仕草とか、身振りと考えたら何となくわかるような気がします。形という意味では抽象だけど、その形を知覚したり認識するためには、その形が具体的な物で構成されていなければならない——ということでしょうか。

そう考えると、視覚でとらえている形そのものも模様と同じだということになります。ということは、見えるものすべてがチェシャ猫の笑いみたいなものになりそうです。

みなさん、笑いを思いうかべてみてください。誰の笑いでもいいです。できれば目をつむってください。待っています。

*

見えましたか？

その笑って何でしょう？ あなたの頭（心でも魂でも脳でもいいです）の中に浮かんだ笑ってイメージですね。心象とか印象です。つまり、思いの一種ですよ。

その笑いを、あなたは自由にあやつれますか？ 心に浮かんだものを自由に、その動かしたり、形を変えたりできますか？ 自由自在にですよ。

べつに笑いじゃなくてもいいです。心に浮かんだもの、つまり思いを自由に操作することができますか？

私にはできません。たぶん、物じゃないからあやつれないのではないかという気がします。それが外なんです。思いは外なのです。正確には、内にある外です。

思いとは、内であって、得体の知れない、つまり本来は言葉にならないブラックボックスであり、実は外なんです。

ですから、笑いに実体はあるかとか、笑いとは何ぞやとか、上でやっていたように問うのはおそらく意味がありません。言葉の綾です。文字通りに取るとたぶん馬鹿を見ます。外という「たとえ」についても同じです。

*

思いをあやつることは、人によってある程度できるかもしれません。ただし、夢のようにリアルな、視覚的であったり聴覚的であったり場合によっては触覚や味覚や臭覚をともしうイメージを自在にあつかうことは無理なのではないでしょうか。まますらない

のではないのでしょうか？

夢は、第二の現実だとつくづく思います。夢は内（思いの中）にあって、現実と同じくままならないし、あやつれないのです。思いどおりになる夢を見てみたいなあ。切にそう思います。

思いは思いどおりになりません。

夢レベルの思いを自由にあやつれたら素晴らしいでしょうね。もしそんなことができるなら、ままならない現実なんて要りません。ままならない夢も要りません。頭の中で、思いどおりにいろんなイメージをあやつってあげればいいのですから。

思いの中で何でもできるんですよ。どこへでも行けます。思いを思いどおりにできるのです。人の欲望には限りがありません。実に欲深い生き物なのです。

*

話を戻します。

ちょっとだけなら可能だとしても、現実はいじれないしあやつれない。どうやら、思いも思いどおりにできそうもない。第二の現実である夢も、まず思いどおりならぬし、いじれない。

人生とは、つまり人として生きていくのは、ままならないことだらけ。

そのままならない森羅万象の中にあつて、唯一言葉だけが、そこそこいじれるしあやつれる。じっさいには、いじったりあやつれる気分にしてくれるだけみたいだけど、とりあえず、この何でもできるという気分を大切にしよう。

何しろ、言葉があつて、ここまで来たのだから、だいじょうぶ。月にまで行けたじゃない。2000年問題に打ち勝ったじゃない。地球の気温も上がったじゃない。これからもだいじょうぶに決まっている……。

適度にままならない

＊

ままならない、ままならないかも、ままならないなら、ままならないだろう、ままならないかな、ままならないでしょう、ままならないことはない、ままならず。

人生はままならないです。人として生きているのがままならないみたいです。現実だけが思いどおりにいかないだけではありません。夢も思いどおりに見られません。仮想現実も思いどおりになるようではないようです。

仮想現実の中で思いのままに振る舞うことができるとすれば、つまらないでしょうね。適度のもどかしさとままならさがないと、つまらないのは、ルールという縛りのあるスポーツや遊びやゲームからルールを取れば成り立たないのと同じです。

適度に面倒くさかったり、苦しかったり、つらかったりしないと人生も、味気ないかもしれません。適度、いいあんばいにといいことでしょう。何でも、加減が大切なようです。

適度にままならないというのが、現実っぽさリアリティの条件なのかもしれません。ゲームや仮想現実もうまくいきすぎると、やらせっぽくて、リアルじゃないということですね。ある意味、贅沢な話。

適度といっても、もちろん人それぞれですから、きつめがいい人も、ゆるめがいい人も、いるでしょう。そのときの体調や機嫌や気分にもよりますね。「きょうはちょっとゆるめがいいなあ」「気分を変えてつゆだくでお願いします」いろいろな注文が考えられます。

私もあなたも自分も他者も、ままならない。自と他に振りまわされます。つねに移ろいゆく自と他に、です。

きつく、きつめ、ゆるく、ゆるめ、ほどよく、適度に、過度に、過激に、もっともつと、がちがち、がんじがらめ、タイト、ぴちぴち、ゆるゆる、ずるずる。

繰り返えしになりますが、このきつさやゆるさ加減に不満があると、現実、思い、夢、仮想現実、遊び、ルール、法律、人生はつらくなるのかもしれない。じつにままならないし、もどかしいものですね。

*

ままならない、もどかしい、めんどくさい、いらいらする、おもいどおりにならない、むき一つ。

仮想現実の元祖というか原型が、思い、つまり想像、空想、妄想、幻想、幻覚、夢、そして言葉の使用だとといえるかもしれません。

昔々、ヒトがうだつの上がらない尻尾のないお猿さん (ape) だったころからいまに至るまで、思いは人を癒し、なだめ、元気づけ、興奮させ、怒らせ、悲しませ、喜ばせ、楽しませてきたのでしょうか。

思いによって人は行動してきたのかもしれません。思いによって現実での人の動きが左右されるという意味です。そんなふう to 思いと現実はつながっているのかもしれません。

思いの中で夢は特権的な位置を占めているようです。ゆめ、ゆめうつつ、うつつ。

*

ままならない、まま、ままに、思いのまま、言われるまま、為すがまま、ナスがママ、パパがきゅうり、思いどおり、言うとおおり、するとおおり、やるとおおり、そのとおおり、園と檻。

夢や思いのさなかにいる人は、ある意味滑稽です。まわりの人から見ての話です。口を開けて眠っている人、心ここにあらずという感じでぼけーっとしている人、寝ぼけている人もおかしいし、思いだし笑いをしている人なんて見ていて笑えますね。

RV で使うゴーグルを装着している人も、端から見ると滑稽です。見ていて、こちらが恥ずかしくなります。自分がするとしたら、ひとさまにはお見せしたくない格好です。トイレで便器にまたがってスマホをいじっている姿と同じくらい、恥ずかしい。

そもそもゲームにしろサイトの閲覧にしろ読書にしろチャットやメールにしろ、スマホをいじっている姿は、見ていてすがすがしいものではありません。いまパソコンをいじってこの文章を書いている私も、この姿をひとさまに見られたくないです。にやにやしたり眉をしかめたり鼻くそをほじったりぼかんと口を開けているにちがひありません。

思いに耽る姿は、他人に見せるものではないようです。

ゴーグル装着で仮想現実にあっても、汗をかくし、おならはするし、おしっこやうんちはしたくなるし、いつかご飯を食べたり、睡眠を取らなければなりません。スマホゲームをやっているときと同じく、こういうことがあるのって面倒くさいですよ。

人生はままならない。夢も思いも仮想現実も言葉の世界も、人生という枠の中の話、ヒトという生き物の枠の中の話のようです。人をやめたら、どれも楽しめません。

ぼっち決めて、二十四時間覚醒なんていうのもNGです。人でなくなります。適度に、あくまでも適度に。身体あつての思いということでしょうか。

*

ままならず、ままならないことはない、ままならないない、ままなる、ままになる、ばばになる、おやになる、こどもになる、こどもがえり、あかちゃんがえり、せんぞがえり、こむらがえり、こむろがえり、おかえりなさい、かえれってば、かえろかな、かえるのよそうかな。

言葉はすごいです。言葉を使うと何とでも言えるからです。「カラスとは白い爬虫類である」とか「私はいま死んでいる」なんて言えます。「カラスが白い爬虫類の歌に憧れる」と書くと詩になります（ならないか）。

私は言葉。私は言葉である——。言葉をいじる最中には、自分が言葉になったような、言葉になりきっているような、言葉に自分を乗っ取られたような心もちになることがあります。この文章を書いているのは、私であったり、星野廉であったりするのではなく、言葉だという感じ。

言葉はそこそこいじれるし、あやつれます。でも思いのままになるわけではありません。生まれたときにすでにあつたものを借りているという意味では借り物であり、どんな言葉も他の誰かが使っているという意味では共有物なのですから、当然ですね（星野廉なら言葉は「外にある」「外からやって来る」とか「外そのもの」だなんて偉そうに言うでしょう、私は言葉）。

「いじる」「いじくりまわす」「適度にままならない」「言葉は外にある外そのものである」なんて言葉は、私のもの、まして専有物などではぜんぜんなくて、いまも誰かが使っているにちがひありません。

「本当の日本語ではない」「本来の使い方じゃない」「その言い方は間違っている」「そんなの正しくて美しい日本語じゃないっつーの」

ある部分だけを指摘してかっかする人がいますが、ご当人は「本当の」「正しい」「本来の」言葉と「本当ではない」「正しくない」「本来ではない」言葉をちゃんぽんで使っています。明治時代でも江戸時代でも平安時代でもいいですから、お好きな時代の言葉遣いと表記にお戻りください。ただしズルしないでくださいね。ぜんぶ「正しく」「本当の」「本来の」にするんですよ。

言葉は誰もが自由に使っていていいと思います。何か差し障りがあれば、その都度自分で解決すればいいのです。言葉の使い方は、その人の生き方そのものです。ひとさまの生き方をとやかく言ったり否定する気にはなりません。

とはいえ、言葉はままならない。自分の発した言葉が、どう聞かれ、どう読まれ、ど

う受けとめられるかは、相手が主導権を握っています。その意味で、言葉は外にあるのです。しかもその相手は無数です。相手は自分と同様に、つねに移りかわりつつある存在ですから、無数です。

ままならない、もどかしい、めんどくさい、いらいらする、おもいどおりにならない、むきっ。

言葉から離れることはできそうもありません。なくなるときまでは。そのときには、感謝してお返ししましょう。借り物ですから。

まだらであることの、もどかしさと、ままならさについて

＊

スクロール

もどかしい、ままならない、ままに、まにまに、まにま、まんま、まま、ま、まあら、まばら、まだら、まれ、むら、ぶち、ふ。

note で記事を書いている、もどかしい思いをすることがあります。パソコンの画面を見ながらキーボードを叩いて書いているのですが、ある程度の長さになると、前に書いたところを見たり、全体を見るためにスクロールしなければならなくなります。

大学ノートに書くときにはページをめくらなければなりません。本を読むときにもめくります。原稿用紙とか閉じた書類も、めくります。読み書きをするときに、めくっていたのが、いつの間にかスクロールするようになりました。

「スクロールする」は「スライドする」ともいうようです。この scroll はもともと「巻く」とか「巻物」だったことが、英和辞典を読むとわかります。よく見ると scroll には roll という文字が見えますね。

roll にも「巻物」という意味があり、「転がす、転げる、転がる」という動詞としても使われます。ローラー (roller) もこれから来ています。

昔の書物は、文字の書かれた石板や紙や竹でできたものを「閉じる」や「重ねる」や「めくる」のほかに、「巻く」(石はできないみたいですけど) という形で扱い保存してきたそうです。

そう考えるとスクロールは「巻く」にもどったといえそうで、なかなか興味深い話だと思います。

ワープロ専用機

話を、もどかしいにもどします。

もどかしいのです。長い文章になるほど、スクロールを頻繁にしないと書けないし読めないのです。テキストエディタの文書もそうです。

最近記憶力が衰えてきて以前のような長い文章が書けなくなりました。全体が把握できなくなるからです。体調が悪かったり熱っぽいとよけいに視野が狭まります。この視野というのは、文字を把握できる範囲くらいの意味です。いまのところ、眼科的な意味での視野には問題はなさそうです。有り難い。

ふと思ったというか、既視感を覚えました。自分の書いたものが把握できないもどかしさ——。

あれです。思い出しました。ワープロ専用機です。

初期のワープロ専用機は、とてももどかしい機械でした。なにしろ、ほんの数行しか表示されない小さな液晶表示パネルがあっただけで、自分が書いている文章が見えないのです。印刷してみないと全体が確認できないという意味です。

その表示パネルがしだいに大きくなっていったので、仕方なく買い換えていました。

もどかしいですよ。この記事の一行しか表示されないディスプレイを想像してみてください。読みにくいですね。文章が頭に入りません。人が文章を読むときには、その前後を見ながら読んでいるようです。

まして自分が書くとなったら、たとえ自分が書いた文章でも、全体が見えないと混乱するし、だいいち不安でしょうね。もどかしいし、ままならないでしょうね。

まだら、まばら

いまの私の記憶が、そんな感じなのです。極端にいうとですけど、自分の記憶とか認識とかがまだらとかまばらに感じられるのです。グラデーションとかモザイクともいえるかもしれません。あ、まだらだけではなく、ぼやけてもいますね。ぼやけるやぼけるについては、またいつか書こうと思います。

かつて『機械状無意識』（フェリックス・ガタリ著/高岡幸一訳）というすごくカッコいいタイトルの本があり、買って読んだのですが、さっぱりわかりませんでした。でも、そのタイトルにぞっこん惚れてしまいました。根がミーハーなのです。

いまの私の記憶は「まだら状意識」という感じです。まだら状意識の下に「まだら状無意識」があるのかもしれませんが。この言葉を見ると、なんだがイメージが湧いてきてわくわくします。

で、また、ふいに思ったのですが、このまだらな意識というか現実感のもどかしさは、目隠しをした複数の人に象を触らせるという話に似ている気がします。鼻、胴体、足、尻尾を触った人が、それぞれ異なった印象（この象は像と同じく形という意味らしいのですが、奇しくも象ですね）を述べるという例の話です。

で、またまた、思い出したのですが、レイモンド・カーヴァーの『大聖堂』（村上春樹訳）という短編で出てくる、盲人に大聖堂がどんなのかを説明する話とも似ています。大聖堂を見たことがない盲人のもどかしさ、その盲人に大聖堂について伝えようとする「私」のもどかしさ、この作品を読む者の味わうもどかしさ。

言葉で書かれた文章というものを読むもどかしさとままならさは、そもそも人の意識（知覚）と無意識（思い）がまだら状でありまばらであるからではないでしょうか。こんなふうに私は短絡しないではられません。

さらにいうなら、現実、思い、夢、言葉の使用にまつわるもどかしさとままならさの底には、このまだらな人間存在のありようがあるのではないのでしょうか。

また、障がい、老化、病気、体調、気分、こういったものともだかも大きくかかわっている気がします。どれも、濃淡が、グラデーション、かたよりがあって、とりとめがなく、ままならないものばかりです。そのあらわれようが、まとまっていたり、整然としていないのです。

それにしても、まだらがまだらについて思考するなんて、ギャグみたいな話ですね。いや、ギャグみたいな話ではなく、ギャグなんです、きっと。

ままならさを感じる自分

誰もが経験する可能性のある障がいや病気（精神疾患を含みます）や老化を想像すると、

ままならないですね。ひょっとすると、自分もじゃないでしょうか。自分って、ままならないですよね？ 自分の体、自分の気持ち、自分の性格、自分の機嫌。

という感じがイメージできるのではないのでしょうか？ 自分に備わっている、さまざまな機能が失われたり鈍化していくというイメージです。

ひょっとすると、年を取ったり、障がいや病気にもまわられていなくても、「自分のままならさ」を感じるものが、誰にでもあるのかもしれませんが。

「自分のままならさ」を感じる自分って何でしょう？

体がうまくうごかなかったり、病気がなかなか治らなかつたり、自分の感情をコントロールできなかつたり、気分が左右されたり、自分の性格を変えたいと思ったりする場合、その「ままならさ」を意識する自分って何なのでしょう？ 脳ですか？ 心ですか？ 精神ですか？ 魂ですか？ 心理ですか？ 意識ですか？

答えは出そうもありません。

「自分のままならさ」を感じる自分って何でしょう？ 「自分と何か？」の答えが出な

いと同様に、答えは出ない気がします。

自分とは外だからです。正確に言えば、自分とは内にある外なのではないでしょうか。

ままならないものを、外にある外と呼ぶ。外にあるから外は、思いどおりにあやつれない、という意味で、ままならない。

内にあり内であるはずの自分が、ままならない。ままならないと感じる自分も、ままならない。ままならないものを、外にある外と呼ぶのなら、内にあり内であるはずの自分は、実は外ではないか。自分とは、内にある外なのではないか。

言葉の綾に入りこむしかありません。言葉の「模様・紋様・文様・形・かた・象」をいじったところで、何にもたどり着けない気がします。そもそも、あれは「何か」にたどり着くためではなく、ひたすら、となえ、なぞるためのものではなかったでしょうか。

かいてしるしたり、それをよんだり、さらには、のこしてためたり、めくったりするようになったあたりから、それていったのではないのでしょうか。

ままならないものは遠隔操作するしかない

「思いどおりにできない」のであれば、「思いどおりにできる」と言葉で言えばいい。これが言葉をいじることであり、言葉をあやつることです。うまいへたはありますが、言葉をいじったりあやつったりするのはある程度できます。比較的簡単です。

とはいえ、「思いどおりにできない」状況は変わりません。こういう状況を「外にある外」と呼びましょう。これはたとえです。家の内（なか）にいて、外のものを思いどおりにできない状況を想像してみてください。

想像するとは思うことです。

「思いどおりにできない」のであれば、「思いどおりにできる」と思ってみてください。こ

れが思いをいじることであり、思いをあやつるのですが、これは難しいです。思いが思いどおりにできないものだからです。夢が思いどおりにならないのと同じです。

思いどおりにならない、つまりまならないものは、思いどおりになるものに置き換えていじったりあやつるしかありません。置き換えるのです。代わりとか代理をいじったりあやつるのです。

遠隔操作に似ていませんか？　たとえば、画面を見ながら、遠くにあるものをキーボードとかハンドルみたいなもので操作する仕組みのことです。広くおこなわれていますね。人のやっていることは、ほとんどが遠隔操作です。

車の運転も自力でやっているわけではありません。代理を使っているのです。パソコンやスマホでの文字入力もそうです。ゲームの操作もそうです。テレビという仕組みもそうです。望遠鏡や顕微鏡を使っての作業もそうでしょうね。

対象が遠くにあっても近くにあっても、大きくても小さくても、代理を使う作業であれば、遠隔操作です。間接操作みたいな感じの遠隔操作といいたいでしょうか。

数学なんて、遠隔操作だと思います。何しろ抽象的なものを相手にして、それをいじったりあやつったりした気分になっているのですから。それが有効であれば当たりであり、当たらないとハズレです。つまり賭けているのです。

科学技術とか学問の根底には遠隔操作があります。言葉とか記号とか数字とか代理を使うという意味です。

遠隔操作は賭けなのです。当たり外れがあるという意味です。そりゃあ、そうですね。代わりを使っているわけですから、うまくいくかいかないかがあるのは当然です。そもそも代わりを使わなくても、人が現実を相手にいじったりあやつる作業をすれば、当たり外れはありそうです。成功と失敗です。

成功と失敗も程度の問題、つまりグラデーションでしょうね。まだらであり、まばらなのです。いじったりあやつって、そこそこの成果があがればよしとするなんて、よく

あります。

遠隔操作として、上で数学をあげましたが、私は数学が大の苦手です。誰でもやっている遠隔操作として、言葉をいじることがあります。言葉をいじることによって現実のシミュレーションをやっていると考えることもできそうです。シミュレーションとは遠隔操作ではないでしょうか。

ところで、もどかしい遠隔操作（えんかくそうさ）と隔靴搔痒（かっかそうよう）って、語感（意味されるもの）と字面（意味するもの）が似ていませんか？ まさにシニフィエとシニフィアンの擬態というかシンクロみたいじゃないですか。

遠隔操作かっかそうよう＝隔靴搔痒えんかくそうさという感じ。あら、不思議。言葉の綾フィギュール・figure、恐るべし。

代わりのものをいじるしかない

ここまで書いてきたことを簡単にまとめたいのですが、たとえるのがよさそうです。つまり別の話に置き換えてみます。代わりを使うのです。

あなたはおりの中にいます。おりの外にはりんごが一個あります。あなたはお腹がペコペコです。りんごが食べたくて仕方ないのですが、おりの外にあって手が届きません。

どうしますか？

「りんごが食べたい」と叫ぶのも一つの手でしょう。言葉にすることでいくぶん気持ちが収まるかもしれません。収まらないかもしれません。言葉にするのは賭けなのです。

「私はりんごを食べている」というお話とか詩を作るのもいいでしょう。りんごを食べているさまを思いうかべて言葉にするのです。思いうかべるだけよりも、ましかもしれません。空腹が高まるだけかもしれません。言葉にするのは賭けなのです。

どんなにいじろうとしてもままたらない現実を、ある程度いじることができる言葉をいじることはいじった気分になれるとすれば、これが言葉の有り難いところかもしれません。

＊

言葉にしているうちに眠くなって、そのままおりの中で居眠りをしたとします。おりの外にあるりんごのことが頭にあって、りんごを食べている夢を見るかもしれません。夢ですからリアルです。

鮮やかな赤いりんごの色が見えて、匂いや手触りや舌触りや味がするかもしれません。さくさくと歯で噛む音が聞こえるかもしれません。お腹がふくれるかもしれません。

ぜんぜんそんな夢を見ないとか、オオカミに追いかけられた夢を見るかもしれません。どんな夢を見るかも賭けです。

賭け賭けとさかんに書いていますが、現実とか人生は偶然性が立ちあらわれだと私が考えているからなのです。ごめんなさい。もう少しお付き合いいただければうれしいです。

＊

言葉も頼りにならない、夢からも覚めたとなれば、空腹とたたかうしかありません。おりの向こうの目の前にりんごがあるのです。

お腹がどんどん空いてきます。りんごが食べたい。おりの向こうに行きたい。思いだけがつのります。

どうしましょう？

お腹が減るのは仕方ありません。体は思いどおりになりません。体は自分の一部ではありますが、ままたらないものです。ままたらないのは外の現実だけでなく、内である体もままたらないようです。空腹のために体が震えてきました。体はままたらないものです。

気が遠くなりそうです。気が遠くなるのは体でしょうか？ 心でしょうか？ 意識でしょうか？ そんなことを考える余裕なんてありません。生きていることは、ままならないことのようにです。

食べたい気持ちを抑えましょう。食べたいというままならない思いを抑えましょう。

食べたい。食べたい。食べたい。食べて気持よくなりたい。

この思いは収まりません。思いはままならないもののようにです。

食べたい、食べたい、食べたい。

この思いをかかえながら、いつか無くなるのでしょうか。無くなったあとにも、この思いは残るのでしょうか。そうであれば、あの世もままならないという理屈になります。

食べたい食べたい食べたい。たいたいたい。

え？ 悟りですか？ 往生ですか？ 天国ですか？ それって言葉じゃないでしょうか（お互いに見たことも経験したこともない事象について、言葉だけをたよりにしながら、その実体を前提にしたようなお話をするなんて、お付き合いしかねるという意味です）。言葉が外と内の両面を備えてなんぼであるとするなら、無くなったときには、物を持って行けませんから、たぶん言葉もない気がします。

思いが残り、その思いは持って行ける、ですか？ 思いはままならないもののようにですけど、それをどこかへ持っていくのですか？ ままならないものにそんなに執着するなんて、それって虫のいい話というか、欲深くはありませんか？ それとも、もっと気持よくなりたいたいのですか？ 自分だけで？ 欲張るのはやめませんか？

生意気を言ってごめんなさい。私の悪い癖です。

『魂の日』

話をもどします。この記事で、いちばん言いたかったのは、ままならないと感じる自分があるらしいということなのです。

このところ古井由吉の小説やエッセイばかりを読んでいます。

古井の文章を読んでいると、ままならないとか、ままならないと感じる自分という言葉やイメージが浮かびます。浮かぶのが頭なのか心なのか脳なのか意識なのかわかりません。

そもそも自分とか思いとかいったものが不明なのが、古井の書いた文章の世界なのです。その不明とか境とかいったイメージをしきりに感じます。

人が生きていくとき感じるままならないものはたくさんあります。数えきれないとか無数という言い方をしてもいいでしょう。生きてること自体がままならないと同義だという気がします。

ままならないと感じる自分とは何か？ 体なのか、心なのか？

ままならないと感じさせる対象が無数にあるのなら、感じる自分も無数にあるのではないのでしょうか？ 無数というよりも常に移りかわっているのかもしれませんが。

ままならないと感じさせる対象の数というよりも、ままならないという状況やありようが、人においては常に移りかわっているのかもしれませんが。このありようというのは、体言的ではなく用言的であるというたとえも可能かと思います。

移りかわる状況やありように応じて移りかわる、まだらな自分。もしそんな状況やありようがあるのなら、自分という言葉やイメージではすくえないものだという気がします（まだらはすかすかでもあるのです）。自他を超えているとか、自他が不明であるという感じですけど、これも言葉でありイメージであって、遠隔操作をしている以上、どこにもたどり着けないみたいです。

そういうたどり着けなさを感じるのが、古井由吉の文章なのです。少なくとも私にとってはそうです。

いまもっともスリリングに思えるのが古井の『魂の日』という作品集です。これは古井の病床記であり闘病記でもあります。では、読書にもどります。

お代理さまたちのひな壇

＊

かつら、お面、仮面、お化粧、表情、顔つき——こうしたものは「表象の働き」とか「象徴の仕組み」という言葉でひっくるめることができそうです。つまり、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることです。要するに、代理を用いるわけですね。

代理と言えば人形ではないでしょうか。「人形は顔が命」というフレーズの人形ですが、人に似せてつくった「ひとかた」とも言われています。人間の代わりに飾られたり、文字どおり身代わりとして犠牲になったり、お子さまの相手になったりします。代理と言えば、内裏びなを思い出します。両者のあいだに関係はなさそうですが、似ています。

おひな様はえらそうにしていますね。実際、えらいお方らしいです。内裏雛（だいらびな）は、高貴なお方のお人形。だから、ひな壇の上のほうに控えていらっしゃるのです。

＊

この「ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きものです。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよいます。そのうようよに「壇＝段」がある、つまり格付けされているのです。

「ひな壇」は「虎の威＝衣」と二点セットで、クラス分けしたり、棲み分けして、暮らすわけです（今は駄洒落です、念のため）。これが代々続けば、例の二世、三世、そして世襲ということになります。仲間うちで「虎の威＝衣」を譲ったり譲り合えば、天下り、渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「虎の威＝衣」は「虎の位」でもあります。ペーパーからキャリアまで、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物まで、多岐にわたる種類があります。

引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえます。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんで、これがご奉公なの？ 公僕、最後のご奉公ってわけですか？ ここまで来ると、もうめちゃうちゃではないでしょうか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり騒がないが不思議です。

*

人間は人間よりも、もっともっと偉い存在がいて、自分がその代理を務めたいという、願望＝欲求＝祈り＝野望を持っているのではないのでしょうか？

Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面を被り、表情を真似て、時にはお化粧品もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、こんなふうに化ければ、〇〇様なんて呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

そんな具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。そして、ますます図に乗る。どうして、こうなっちゃったんでしょう？ 昔々と関係ありそうです。

たとえば、次のような具合です。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」「ニワトリとブタが増えますように」「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」「今度の戦（いくさ）に勝てますように」「あいつとの賭けに勝てますように」「お父さんの怪我が早く治りますように」「娘がいいところにお嫁に行けますように」「亡くなった後に天国に行けますように」「元気が出ますように」

というふうに庶民が願い、祈ります。すると、虎皮のパンツをはき、お化粧品をするか仮面を被り、かつらをつけた代理人がしゃしゃり出て来て、えらそうに次のように言います。

「お任せあれ。任せとき。大丈夫。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ この

間は、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなった時には、代理人は即座に仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらも外して、「わたしは、単なる代理でございます」と言って、責任を転嫁すればいい。

または、「あなたの信心が足りんからじゃ」と、これまた責任を転嫁すればいい。

このように、「代理人=代行者」は、実に気楽でいい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。まつりごとでお祭り騒ぎ。笛や太鼓もあります。

「代理」とか「代理人」というのは、実はかなりシリアスで怖い問題なんです。だって、そういう仕組みや人たちによって世界は動かされているんですから。後ろには権力という名の暴力があるから強いし怖い。ある日とつぜんあなたの身柄を拘束できるのが権力です。理由は後付けでいいのす。

嘘じゃありません。テレビやネットのニュースや新聞をご覧ください。そんな国々が近くにありますよね。

ですから、代理、代理人（もちろん、いい仕事をなさっている代理人もたくさんいます）、仮面、虎皮のパンツ、仮装、お化粧、かつら、作り顔、顔芸には、くれぐれもだまされないように気を付けましょう。

じつは、かけていない

＊

病院で検査の結果を待つときには待合室でぼーっとしていることが多いのですが、ぼーっとしながらも頭の中ではいろいろな思いや言葉や景色や模様が、断片的に浮かんでや消えていきます。

待っているあいだに何かを考えて気を紛らわすこともあります。先日は「かける」という言葉をいろいろ転がしていました。「かく」「かける」「かかる」「かけ」は多義的で大好きな言葉です。

気がかりなことがあるとその気を紛らわすために「かける」をいじる。これは、姑息ではありますけど「毒をもって毒を制す」という作戦でもあります。

＊

気がかりとは気にかかることがある状態をさします。検査の結果を待っているのは宙ぶらりんの状態に置かれるわけで、まさに「懸ける・懸かる」のイメージです。何かにひっかかっている感じですね。懸念と書けばお分かりいただけるでしょうか。

自らが出した糸で木の枝に引っかかり、風に吹かれてぶらぶらしているミノムシと似ています。成りゆきまかせ、風まかせ。あがいても仕方がないので、すべてを任せているのです。でも、何に任せているのかは分かりません。体が知っている可能性はありますが、頭には分かりません。

「まかせる」という身振りだけがぶらぶら揺らいでいる。これが私のイメージする「かける・かかる・かく・かけ」なのです。

気がかりな心もちで検査の結果を待つのは賭けに似ています。とはいえ、賭けたところで、じつは賭けているわけではないのです。賭けとは、何かに任せていながら、その何かが分からないという点で、徹底した無力と不明のあらわれだと言えます。

賭ける、祈る、何も考えない、何もしないでいる、ふてくされる。この一連の身振りに違いはあるでしょうか。何かに任せていながら、その何かが分からないとは、そうした不毛で不条理な状況をさします。宙ぶらりん。ぶらぶら。

その何かを「圧倒的な宇宙の偶然性」などと置き換えてみたところで空しさだけが募ります。

＊

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。走っても走っても走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。苦しいです。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。

気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは描けてはいない。絵を描いても描いてもじつは描けてはいない。文章を書いても書いてもじつは書いていない。

身につまされます。切りがないのです。徒労感がつきまといまします。あがき、もがいているのに、達成感がなかなか得られない。なぜなのでしょう？　なぜ、こういう気持ちになるのでしょうか？

＊

痒いところを搔いても搔いてもじつは搔けていない——。これが分かりやすい説明になると思います。というか、体感的に分かるのではないのでしょうか？

隔靴搔痒（かっかそうよう）のイメージです。つまり、たとえばブーツの上から足の痒い箇所をどんなに搔いてみても、じっさいには搔いていないので、それが分かっているにもかかわらず掻きつづけるしかない状況を想像してみてください。

隔靴搔痒と似た響きと字面の言葉に遠隔操作があります。kakkasouyou と enkakusousa ですが、アナグラムができそうなくらい似ていませんか。

文章を書いても書いてもじつは書いていない。これは文章を書く習慣のある人なら誰もが、何となく、あるいは切実に感じていることではないでしょうか（天才は除きます）。事実ではなく印象の話です。

書いたのですから書いた文章はあります。でも、書けていないのです。書けた気持ちになれないのは、書いていないと同義なのです（天才は除きます）。心当たりがありませんか？ 凡才である私はしょっちゅうこういう気持ちになります。あがき、もがくのです。

＊

なんで、こんな隔靴搔痒的な無力感や徒労感を覚えるのでしょうか？

遠隔操作（柄の長い孫の手で痒いところを搔く）をしているからにはほかなりません。何かの代わりにその何かではないものをつかっているからです。言葉のことで。本当は世界を、あるいは森羅万象を相手にしたいのに、その代わりに言葉を相手にするしかない、もどかしくままならない状況があるということです。

簡単に考えましょう。花の代わりにその花ではない花という言葉をつかっているという意味です。言葉は物や事の代わり、つまり代理なのです。花でも愛でも神でも真理でも同じです。言葉なのです。これを遠隔操作と言わないで何と云えばいいのでしょうか。

もちろんうまく行っただと感ずることがあります。うまく書けた、うまく搔けた、です。でもまた痒くなるのが必ずあります。うまく書けた（搔けた）と感ずるときには賭けに一時的に勝ったと言えます。でも、孫の手をつかっているという状況から逃れることはできないのです。

病院の待合室では、結果を待つというままならない状況を前にしてあがき、もがくわけにはいかないのです、ぼーっとしながら待つのがいちばんいいようです。

ありえない文章

＊

ありえない文章を夢見ることがあります。イメージだけがあって、そんな文章が書けるはずがないのに、書きたいと願うのです。

途方もないのが夢であり、夢は何でも肯定してくれますから、それに甘えてありえない文章を夢想してみたいと思います。

＊レトリックだけでなりたっているような文章

内容なんて無い様なもので、物と事の有り様がきわだつ。ただ言葉の形と模様と動きだけがきわだつ文章。泉鏡花の文章をイメージしてもよろしいのではないかと思います。ただし、レトリックは書き手によって異なりますから、私は私のレトリックを追いもとめるしかありません。私は泉鏡花が苦手です。

レトリックだけでなりたっているような文章は、いわゆる美文ではありません。私のイメージする美文とは、快い定型からなる文章であり、さくさく読めて読んでいるのが言葉であり文章であるのを忘れるような文章です。

美文は透明です。読者は、言葉と文章ではなく、その向こうにある意味や映像やイメージを思いうかべるのが私の考える美文なのです。美文とレトリックは似ていますが、レトリックはあくまでも模様ですから透明ではありません。

＊運ばれていくように読める文章

読んでいて気持ちいい文章があります。思いつくままに挙げると、村上龍の『コインロッカー・ベイビーズ』、野坂昭如の『アメリカひじき』、蓮實重彦の『批評 あるいは仮

死の祭典』、古井由吉の『仮往生伝試文』、井上究一郎訳のマルセル・ブルースト作『失われた時を求めて』です。どうして気持ちがいいのでしょうか。

これは個人的な思いですから、自分で考えて答えるしかありません。答えは出ないでしょうが、応えることはできそうです。

上記の作品に共通するのは、あれよあれよと読んでしまうという点でしょうか。意味とか内容とかストーリーなんてどうでもいい。少なくとも私にとってはそうです。だから「理解する」は頭にありません。まして作者の意図なんて考えたことすらないです。

で、あれよあれよですけど、これは読んでいて運ばれていく気分と言っていいかもしれません。「いまここ」しかない感じです。前も後ろも意識しません。それが、あれよあれよなのです。あとは字面でしょうか。べたべたとした字面というか、すかすかはしていません。イメージとしては古文の原文に似た字面です。

* 「まだ、まだなの？」感のある文章

古井由吉の文章も、私にはあれよあれよなのですけど、野坂や蓮實の場合とはちょっと違います。野坂や蓮實の文章が——響盛を買うのを覚悟で申しますと——快便や下痢であるなら、古井の文章は便秘に似ている感じなんです。

ああ、まだまだ。出ないよー。うーん、うーん。宙ぶらりんの忘我状態というか、要するにまだまだ感です。いましているのは抽象論ではなく、すごくリアルな感覚のお話なのです。

まだまだ先を伸ばされる快感という意味ではサスペンスに通じるものがあります。体力がないと読めない気がする古井の文章ですが、何だか死にかけみたいな超脱力系の雰囲気はただよものが不思議でなりません。

「ああもう駄目、まだまだ、ねえまだなの？」の永遠化という感じです。癖になります。一種の多幸福感と言えは言いすぎでしょうか。

まだまだという感覚には二つあるような気がします。一つは、「まだなの？」というふうに、どこかにたどり着きたい気持ちです。これは最後にどこか、あるいは何かにたどり着いて一件落着という「まだまだ」です。

分かった、正解、やったね、ガッテン、はい、よくできました、ユリイカ、ゴール達成、スタンプ、押しましようね、お疲れさまでした、ご褒美にチューしちゃう。これじゃ、悟りみたいではないですか。私は悟りたくはありません。そんなに欲深くないというか、そんな贅沢は言いません。

もう一つの「まだまだ」は、終りがなさそうという感覚です。私の言っているのは、こっちのほうなのです。そもそも終りなんて考えないのが、私の好きな「まだまだ感」だと言えるかもしれません。

*楽曲のように読める文章

中上健次の短編が頭にあります。具体的には、『岬』『浄徳寺ツアー』『蛇淫』です。

中でも『浄徳寺ツアー』が好きです。短文だけからなるわけではなく、ときどき長めの文があったり、地の文と、語りと、話し言葉（鉤括弧でくくられるときも、括弧なしではめ込まれているときもあります、まさに象嵌という感じ）がいい感じで混じりあっていて、ああどうなっているのだろうと思いつつもあれよあれよと読み進めることができます。

とりわけ、短いセンテンスと長いセンテンスが——まるで読者の呼吸を読んでいるかのように——リズム良く配置されている部分が心地よいです。そのリズムは、強弱、強弱、強強弱、弱弱強、みたいに感じられることがあります。

文字や言葉であることを忘れます。強いていえば、楽曲を聞いているみたいなのです。ここで気をつけなければならないのは、「楽曲を聞く」が比喩であることです。比喩は置き換えですから、語りたいもの、そのものではないわけです。あくまでも「楽曲」みたいなのであって、楽曲とは異なる点を強調しておきたいと思います。

中上健次の短編を読むとさまざまな文体で書き分けられているのに驚きます。古井由吉の短編や、谷崎潤一郎の長編のように書き方や字面が多様なのです。古井と谷崎は長いスパンで書き方を変えていったのですが、中上は短期間につぎつぎと変えていったのです。表現の実験をしていたにちがいません。

文体に注目しながら読むと興味がわいてあれよあれよと引き込まれます。日本語の可能性をさぐったなどという陳腐で抽象的な評価がむなしく感じられます。

中上健次は文章の中にしかいません。文章は言葉から成るリアルなモノに他なりません。具体的には、字面と音（おん）です。頭の中で声を聞きながら音読していることもあれば、文字の形とその連なりだけを追っている場合もあります。

どんどん読み進むこともあるし、ある部分でとどこおっているときもあります。読むとはリアルなモノをめぐっての、あくまでも具体的な体験です。基本的には目の前の細部しかありません。いまここしかない、とも言えます。

*用言体

上で語ってきた四つの「ありえない文章」は、けっきょく用言体なのだと思います。名詞の顔よりも動詞の身振りを重視した文章です。大切なのは顔より表情とも言えるでしょう。固定を嫌い停滞を避けて、ひたすらうつり、ゆれ、ながれる。そんな書き方をイメージしています。

何が書かれているかではなく、どう書かれているかに惹かれて読まれることをめざす。

これはもう自分で書くしかないと思いますが、「ありえない文章」は「ありえない」をめざしているかぎり、ありえません。でも、それが夢であればめざす価値があると思います。

*ありえない夢

以上が、私のイメージする「ありえない文章」です。それぞれの文章についての記述が重複し、あいまいな書き方になっていることをお詫び申し上げます。ごめんなさい。

言い訳をさせていただいたら、あくまでもイメージと夢——それもありえない夢——を語っているからなのです。

こういうありえない夢があるかぎり書きつづけることができるのだとすれば、この夢が終わらないでほしいです。この夢の中で、ありえない文章をひたすら書くしかない。

必死にかく、もがき、あがくのです。書いても書いても「欠く」しかない世界。圧倒的に言葉は足りないし、見る果てがないし、きるにも切りがないし、分けても分からない。それが「ありえない」なのです。(たとえば、いま書いた文章はレトリックだけでなりたっている書き方をめざして書きました。書かれていても何も言っていないのです。ひとり受けギャグの世界に似ていませんか？ また、この書き方には外国語に翻訳するのがきわめて難しいという特徴があります。翻訳する人などいませんけど。)

終りなど考えないで、めざしているのが蜃気楼であると意識しながら、ただ歩くしかない旅なのかとも思います。

用言体

＊

用言体と勝手に呼んでいるものについてお話しします。あくまでも個人的な呼び名なので分かっていただけか心もとないのですが、説明させてください。イメージとしては古井由吉の小説やエッセイに見られる文章のつづり方で、主語が省かれていたり、抽象度の高い名詞や人称代名詞や固有名詞の放つ強い光を避けながら書いていく方法なのです。

「主語を省く」というのは分かりやすいですね。ああ、確かにこのセンテンスでは主語が書かれていない、というふうに誰が読んでも確認できます。お断りしますが、「主語が省かれている」とは「主語が隠れている」とか、あるいは「主語は書かれてはいないが誰の動作や状態なのかは読んでいて分かる」という状態を指します。

古文と呼ばれる日本語の文章では主語が省かれている場合があるが、隠れた主語がちゃんと分かるように書かれている。そんなことを中学と高校時代に習ったにもかかわらず、古典が並外れて苦手なのでずっと逃げてきました。いまでも古文は読めません。

用言体は古文ではありませんが、主語が省かれている（隠れている）場合には、ある行為や状態が誰のものなのかに注意しながら読む必要があります。ただし、主語が省かれていたり隠れていることが用言体の必須条件かと言えば、そうでもありません。

大切なことは、主語があろうとなかろうと、抽象度の高い名詞や人称代名詞や固有名詞による目くらましの光（読む人を分かった気分にさせる虎の威みたいなものです）よりも動詞の身ぶりが目につくように書かれているかどうか、なのです。どう書いてあるか、どう書かれているか、これがもっとも重要な点です。いまお話ししているのは、あくまでも書き方の問題なのです。内容ではありません。内容などどうでもいいとも言えます。内容なんて無いよーです。

＊

なぜ体言ではなく用言なのかですが、名詞が不自然で人工的であるからです。一方の動詞は自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。つまり、やはり不自然であり人工的なのです。

動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。比喩的に言うと動詞は地に足が付いているのです（名詞は出不精で動きがらない）。

そもそも「名づける」とは、自然と向きあう人間が恐怖と不安を解消しようとして「手なづける」ためにおこなっている操作なのであり、人の心理的な動機から生じた処理法だとも言えるでしょう。人の都合で、代理である表象（言葉、イメージ、映像、象徴、記号など）をもちいて名づけている（手なづけている）にすぎません。

＊

用言体で書かれた文章においては、読む人は自分が言葉（作中人物ではありません）になったと感じたりあるいはなりきったり、主語ではなく述語や述部になったような気分に陥ったりそうした印象をいただくことがおおいに考えられます。ストーリーは気にならなくなるかもしれません。

ややこしいことを書いて申し訳ありません。この種の話は、心当たりがあるかどうかにかかわってきます。

＊

で、用言体ですが、書かれている言葉になりきるくらい集中して読まないという意味が取れないこともあります。この読みにくさは慣れの問題とも言えそうです。

ここでまたお断りすることになり恐縮ですが、論理的な思考が大の苦手で（苦手なものが多いですね）、論じるのではなくむしろイメージや印象で物を言っていることをご承知置きください。万事そんな調子で物を書いています。論理的に問い詰められればたちまち答えに窮し、言ったこと（たいていはたわごとのたぐいですが）を撤回しなければ

ばならないほど、つまりまるでヘチマのたわしかナイロンタオルのようにスカスカの論理性しか持ち合わせていないのです。

で、用言体ですけど、センテンスが長くなる傾向があります。読んでいてもどかしい（タマネギやラッキョウをむくのに似ているかもしれません）とか分かりにくいと批判されたり、冗談はよしてほしいとか書いている本人が分かっていないのではないか、というようなクレームめいた言葉を投げられることもなきにしもあらずの文体なのです。

思い出しましたが、蓮實重彦氏の文芸批評や映画批評や小説も用言体だと言えます。蓮實重彦氏の文章においては、名詞（とくに抽象的かつ観念的な名詞、たとえば哲学用語とか文学論で出てくる用語、たとえば、哲学だよ、現代思想さ、ポスト構造主義だど、かっこいいだろう、これ知らないで女の子にもてないだべさ、という感じです）と固有名詞（たとえば、ジル・ドゥルーズだよ、ソシユールさ、ニーチェだど、こら頭が高い、すごいっしょ？ まあそこそこ勉強したもんね、これを記事に入れるとたくさんスキがもらえるだべさ、という具合です）に満ちていても、それらが放つまばゆい光を周到にさえぎり、動詞や動詞だけでなくあらゆる品詞の言葉たちを動員し、その言葉たちの演じる動きと仕草と表情でもって、抽象的な名詞や固有名詞にまわりついた固定したイメージを駆逐しようとするかに見えるのです。「見える」と書きましたが、先ほど述べたように、いまお話ししているのはあくまでもイメージや印象なのです。ただしこれを論理の問題だと解する恐るべき思考力を備えた人たちもいます。過去にじっさいに見たことがあります。縁遠い人たちだと感じました。

＊

用言体は断言を避けます。と言うか、ひとつの断言よりも複数の断言に導くような書き方をする場合も見受けられます。一言で分かるように言ってちょうだい、真理はすごくシンプルなの、そうじゃないのはデタラメか、混乱しているだけ、分かった？ みたいな性格の方は読んでいて途中で投げ出すでしょう。それはそれでいいのです。世の中は、と言うか人の世は、そんなものですから。いま始まったことではありません。分断なんてきな臭いことを言うのはやめて、棲み分けて仲良く暮らしましょう。同じ空気を吸い同じ水を飲み同じ土地に棲んでいるのですから。

用言体は毒です。これは個人的な意見です。そもそも用言体が自分語みたいなものですから、個人的もへったくれもないのですけど。用言体なんてものをでっち上げてひとり相撲をすると馬鹿を見ます。ここに好例があります。ご覧のとおり、にっちもさっちもいかなくなっているのですから、毒にやられたとしか言いようがありません。

ここまで辛抱してお付き合いくださった方は、うすうす感じていらっしょると思いますが、用言体には依存性があります。したがって、熱狂的なファンが少数ながらいて、用言体で書かれた本を買い続けていたり、読み続けているはずで、ここにもいます。

なかには用言体を模している人もいるにちがいません。ここにもいます。格が違うのに困ったものです。先ほど挙げた二人の書き手と比べると、思考力、知識、センス、それに加えて人間としての品格が雲泥の差なのにもかかわらず、身の程知らずとはまさにこのことです。

どんなスターにもファンはいます。亜流もいます（ここにも亜流になり損ねた雑魚がいます）。もちろん毛嫌いしたりあるいは無視する人もいます。で、ファンですが、アイドル（偶像）を真似たがるものです。真似るだの模すると言っても、例の文体模写とは一線を画します。そんなのいっしょじゃん、と一笑に付されること間違いありませんが、違うものは違うもん、なんて泣きそうな顔で抗議します。ちなみに、いまのセンテンスはささやかな用言体の試みです。視点がぶれた印象をお持ちになった方、正解です。雑魚が真似るとこうなります。学（まね）びは形から入る、ということでお許しください。

＊

冗談はさておき、用言体の例を挙げてみます。

＊野坂昭如の『アメリカひじき』。これは手に入りやすいですね。『火垂るの墓』といっしょに収められた形で新潮文庫にあります。あの馬鹿が言っていた用言体っていうのは、こういう感じなのね、というふうにとても分かりやすくてとっつきやすい、つまり分かりにくくてとっつきにくいと分かれば、用言体を感じ取っていたただけたことになるでしょう。そうなれば、とてもうれしいです。

＊村上龍の短編集『トパーズ』所収の『卵』と『紋白蝶』と『鼻の曲がった女』。用言体は確たる定義なんかなしの自分語みたいなものですから、これは用言体だの、これは用言体ではないなんて熱弁を振るっても、「……」とか「ふーん」とか、せいぜい「あ、そう？」とか「で？」というふうに済ませられる次元の話なのですが、『トパーズ』に入っている短編のほとんどが用言体だと言えます。「あたし」という人称代名詞と呼ばれる語が出てくる作品が多くても、あの作品たちでは主語と呼んでいい人格なんてまったくいない気がするからです。あれはほぼ動詞と化した名詞や形容詞や代名詞や……――

文法用語をど忘れしたので後が続きません、ごめんなさい——とにかくそういう語たちが健気に身ぶりを演じているお祭りとかオージー (orgy) なのです。書かれた言葉があれほど見事に書かれた内容を演じている作品は珍しいのではないかとさえ思います。

*内田百間の『東京日記』と『冥途』と『旅順入城式』。これも文庫で入手可能だと思います。掌編集です。読みやすいです。読んでみてください。立ち読みでもいいでしょう (本屋さん、ごめんなさい)。読めそうもなかったら、もちろん、即座におやめください。無理強いにするのもされるのも嫌いです。面白そうだとお感じになったら、ぜひお買い求めください。岩波文庫の『東京日記 他六篇』に『南山寿』という短編がありますが、これが個人的にはいちばん用言体っぽく感じられます。読んでいると即夢の世界に入れます。十章に分かれているのが、持久力のない者にはうれしいです。ご賞味ください。

*古井由吉の『仮往生伝試文』。これは文庫本としては高い価格設定で知られる講談社文芸文庫にあります。二〇二〇年の二月十八日に古井由吉が亡くなり、「追悼 古井由吉」という文字の入った帯が付いているこの本が本屋さんで売られているのを目にしました。増刷されたみたいでファンとしてはとてもうれしいです。現在は同文庫のバージョンが比較的手に入りやすいのではないのでしょうか。私が用言体を感じるのは、この作品の日記体の部分なのです (説話の部分ではありません)。用言体の理想と言っても過言ではないと思います。

girl であり woman であり Melody である

＊

曖昧なものが好きです。多義的であったり多層的であったり、プリズムのように見る位置によって見え方が異なる物や事や人に惹かれます。というか、どんなものでも同様であることはなく、多様なのだと感じているのです。

そういう曖昧さを感じる楽曲があります。ビー・ジーズ (Bee Gees) のメロディ・フェア (Melody Fair) なのですが、この歌では Melody Fair (※映画では、Melody Perkins (メロディ・パーキンス) です。) という女の子の名前自体が詩なのです。

melody は、ご存じのように「旋律」という意味があります。ジーニアス大英和辞書にある語義を並べてみます。

- ・(主) 旋律、節 (ふし)、歌 (曲)
- ・快い調べ、美しい音楽
- ・(詩・声などの) 音調、抑揚
- ・歌うのに適した詩

fair にはもっとたくさんの意味があるので、気になったものだけを挙げましょう。

- ・(文語で) 天候がよい
 - ・(皮膚が) 色白の、(髪が) 金髪の、(人が) 色白で金髪の
 - ・(名声などが) 汚れのない、きれいな
 - ・(文語で) (女性が) 美しい、魅力的な
 - ・(同音の別語で) 縁日、市 (いち)、品評会 (※華やかでお祭りの行事を想起させ、Melody Fair で「旋律の祭典」みたいなイメージも浮かぶと思います。)
- ※映画の中では、Melody Perkins (メロディ・パーキンス) という名前です。

＊

Melody Fair の歌詞を部分的に引用してみます。

Who is the girl with the crying face
looking at millions of signs?
She knows that life is a running race,
Her face shouldn't show any line.

Who is the girl at the window pane,
watching the rain falling down?

Melody, life isn't like the rain ;
its just like a merry go round.

ご覧のように似た発音の言葉がいい具合に縦横に散らばっています。完全に韻を踏んでいるわけではありませんが、似たものが散らばるだけで心地よさを感じさせるのです。反復と変奏の妙です。

また、Melody Fair という美しく響く文字通りメロディのような名前が繰り返されます。その音を乗せている旋律（メロディ）が綺麗なのです。単語の発音と意味に旋律が擬態しているような印象さえ与えています。

韻や似た音の連続は、意味の離れた事物同士に音以外の「似ている」点があること——あらゆる物が多面的だからです——を気づかせてもくれます。言葉が事物をつないでくれるわけですね。花から花へと飛ぶ蜂や、恋や愛のキューピッドみたいで微笑ましく思います。

*

いちばん好きな箇所を挙げます。

Melody Fair, won't you comb your hair?
you can be beautiful too.

fair が hair と韻を踏むという点は、この歌詞で決定的なインパクトをもたらし、この箇所の響きの美しさは比類がありません。won't と comb にも母音の一致が見られます。音読しただけで、ため息がこぼれます。続く、強弱弱強弱弱強というフレーズの you、beautiful、too の同音の連続も快く響きますね。

Melody Fair, remember you're only a woman.

Melody Fair, remember you're only a girl.

名前を呼ぶ、最初の二語で盛り上がり、次第に抑えていき最後はつぶやくように歌われる箇所です。この二行では、最後の a woman と a girl だけが違います。あとは同じ。この繰り返しと差異の妙は見事だと思います。

woman と girl は反義語であると同時に類義語でもあります。つまり、人という存在は多面体（プリズム）なのです。この歌では、この曖昧さ（両義性・多様性）が詩（歌詞）となり人を惑わせるのです。

woman と girl に相当する日本語で見てみましょう。

女の人－女の子（大和言葉）

おんな－むすめ（大和言葉）

女性－少女（漢語・唐言葉系）

日本語でも反義語であり同義語でもあることがお分かりいただけるとと思います。同じ女性なのに、ある尺度や見方で切り分けているだけです。この切り分けを差別とも言います。切られれば痛いし血が出るのに、切ったほうは気がつかないのです。

＊

メロディー・フェア、髪を櫛でとかしてみたらどうかな？

君は美人にだってなれるんだよ。

だって、

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの女なんだよ。

それだけじゃない、

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの娘なんだよ。

つまり、君は「ただの女だから」（男には負ける）と「ただの娘だから」（しよせん子ど

も、しかも女の子だ) が、社会的に不利であると同時に「(髪を櫛でとかせば) 美人になれる」という可能性を潜在的に持っていると感じさせているとも取れます。

「いいかい、君は girl であり woman であり Melody という人間なんだから」——そこまではおそらく言っていないかもしれませんが、そう解釈したくなります。

人をたった一つの語というレッテルで指すことは不可能なのであり、複雑な現実を反映していないのです。こうした現実を失念しているために起こる誤解や苦しみや不和や争いは多いと思われれます。

＊

Melody Fair は映画「小さな恋のメロディ」の主題歌でもあります。この映画のサウンドトラックに収録されている「First of May (若葉のころ)」もいい曲ですね。

この映画の原題は Melody、または S.W.A.L.K です。S.W.A.L.K とは、sealed with a loving kiss の略でラブレターの封筒の裏に書くのだそうです。愛を込めて封をするのでしようね。

この映画は、自分に一方的に貼られた一義的なレッテルに反抗する「女の子」および「子どもたち」の物語にも思えてなりません。「女性対社会」とか「子ども対おとな」という構図を見ることも可能でしょう。もし人が生きづらいとするとするなら、その人の人生は、たとえば、そうしたレッテルたちとの戦いなのかもしれません。

あいまいでやさしい境

＊

小学生の低学年のころに、市内の書店からカレンダーをもらって勉強机の前の壁に貼っていました。世界地図が大きく載っていて、カレンダーの部分は下の方に小さく印刷されているだけでした。

この地図は中学生まで貼っていたので、よくながめたことは確かです。メルカトル図法なので、北極地方や南極大陸がばかでかく見えるのです。地球儀は高価で買ってもらえなかったのですが、その存在は知っていました。それなのに、目の前のばかでかい両極をリアルに感じていました。

地図というのは不思議なものです。いまでも不思議でなりません。立体的な地形と地勢を平面上に描いてあるわけです。地球規模でいえば、球を広げた形で平面化してあるわけですから。生き物の皮を剥いでその皮を壁に貼ってあるようなものです。

＊

メルカトル図法の世界地図をながめながら、大陸、半島、列島、島の形を見て、あれこれ思いをめぐらしているなかで、経線緯線、赤道、日付変更線、国境に目が行き、どうということなのだろう、何なんだろうと考えていた記憶があります。

何を考えていたのかは覚えていません。記憶はあるけど覚えていないというやつです。

大人になり、老年になったいま、あらためて地図帳の世界地図をながめています。あと日本地図や道路マップもそばに置いています。

やっぱり地図って不思議でなりません。

＊

目立つのは直線です。経線緯線、国境、県境、道路、線路、川。いびつな形の中にある直線は異様といえば異様です。そもそも自然界には直線はあまり見えないからでしょう。

外に出て空を見ると、電線、電柱、飛行機の飛んだ跡の白い線。まわりには、道路、建物、家屋、標識、看板、駐車場や駐車スペースの仕切り、ガードレール。どれもが人のつくったものです。

世界地図で国境に注目すると、直線が目立つのはなんとといってもアフリカです。あと中東のある部分も。まだまだあります。歴史的経緯から、いまは少しずつ歪んではいませんが隣国にもあります。

北アメリカの国境には不自然に長く伸びる直線が目立ちます。米国の州境を見て既視感を覚えたので何だろうと考えているうちに、アフリカ大陸に見られる数々の国境にとても似ていることに気づきました。そっくりなのです。

＊

切り分けたのでしょう。切るためには直線が必要です。刃物は直線部分があります。ぴんと張った細い紐でも切れますね。手術でもある部分に糸を巻いて両方から引っばって切断していたような気がします。

縄張りを思い出します。縄を張って直線をつくり、こっちはわたしのものとか「うち」、あっちはおまえのものとか「よそ」と決めるイメージです。張る、切る、分ける。張り切って分けていたのでしょうかね。

分ける、切る。やっぱり、これは人の中にあるのでしょうか。欲求とか欲望のことです。それが直線や長方形や四角という形として、人から出てくる、というか人がつくる。直線や角があるものは、人がいる、あるいはいたという印なのです。自然界にはあまりない。人は反自然であり不自然ですから。

どう見ても、直線からなる国境や州境は、鋭利な刃物で切られた切断面を連想させま

す。おびただしい量の血が流れたはず。数えきれない人たちが死んだはず。

*

何度見ても、国と国の境が直線で区切られているのは不自然な気がします。もともと人間が不自然で反自然だと考えれば不自然ではないのですが.....。その不自然さは、コンビニや量販店にずらりと並ぶ商品の大半が四角であるのと似ています。人がつくるものは四角いのです。

たぶん、規格化された製品を大量生産にするためには、直線で切って四角いものをつくるやり方が適しているのでしょう。処理や作業がしやすいにちがいありません。さもないければ、あんなに整然とした角（かど・かく）があって四角い物たちがあんなにたくさん存在し、それが直方体の箱たちに詰められて運ばれたりはしません。

とはいっても、専門家ではないので、見て思っただけです。印象にすぎません。

*

日本地図を見ていると、県境の形に目が行きます。かつて都が置かれたあたり、いま置かれているあたり、戦国の武将がいたあたりは、いびつに見え、その周辺や辺境になると直線が多いような気がします。いや、よく見ると直線に見えるのは山脈や川を境にしたからかもしれない。それなら納得できます。

道路に目を転じると、そうした周辺や縁へといたるたくさんの道が直線なのは何もないところにつくったからでしょうか。当たり前といえば当たり前、不思議といえば不思議。

かつての都の街路は碁盤の目のように整然としています。そこから遠く離れた北の大都市もやはり直線できれいに区切られています。なんでそうなっているのかは、小学校や中学校の社会科あたりで習った気がします。

外国の都や都市、しかも先進国のそれを真似たらしいという話。まつごと（政治や体制）やあきない（経済や交易）の匂いがします。こうした整然とした美しさには特有のきな臭さがあり、同時に美しい建造物を築きあげた人びとの汗や血や涙の匂いも漂います。

理屈、抽象、概念といったものと、具体的な形や線や匂いとのあいだを行ったり来たりする。知識や情報と、印象やイメージのあいだで揺れる。そういう曖昧な境が心地よく感じられます。すばっときれいに切る必要はないのです。境は曖昧なほうがやさしい気がしませんか。

書いた言葉はどこに行く

＊

自分の書いた言葉たちはどこに行くのでしょうか？

ネット上で文章を公開しているとよく考えます。note で下書きをつくり、それを投稿したとたんに、あなたの目に触れることになります。あなただけではありません。不特定多数の人に読まれる可能性が生じます。一瞬に、ですよ。

自分の書いた文章が人目に触れるなんて、印刷しか手段がなかった時代にはずいぶん時間がかかったはずですよ。そもそも個人の文章が他人の目に触れるのは稀な出来事だったにちがいません。手紙くらいのもものではなかったかと想像します。

まして不特定多数の人たちになんて。まして一瞬になんて。大昔の人なら、これを魔法と言うでしょう。私たちは魔法の世界にいるのです。

公開設定をして文章を投稿した自分の目の前のパソコンなりスマホの画面が、自分の書いた言葉の誕生した特別でかけがえのない場所だと思いがちですが、よく考えるとその画面は世界中にある画面のひとつにすぎないことに気づきます。ありふれたものの一つ、つまり one of them なのですが、この them はおびただしい数になるでしょう。

「星野廉 note 言葉」でネット検索をすると、一瞬のうちに「言葉」の出てくる私の note がヒットするのですが、どこから来たのでしょうか？ 不思議でなりません。どこに行っていたのでしょうか？ 帰ってきたのではない気がします。これを「帰ってきた」なんて、とてもじゃないけど言えそうもありません。

「わが子」とか「分身」のイメージではありません。「他人」のような気がします。

＊

あなたの書いた言葉はどこに行くのでしょうか？

PCやスマホで文章の下書きをつくっていて削除することがありますが、あれは消えてしまうのですよね？ 一瞬のうちにです。仕組みは分からないのですが、キーボードである操作をすると削除した文字列が復活することがあります。

でも、もたもたしているとそれもできなくなり、もう会えなくなります。またちゃんと覚えていて同じ文字列を入力すれば出てきますが、さっきの文字列とはもう会えません。自分が消去した文章が宇宙のどこかでぶかぶか浮いている気がする。そんな意味のことを書いていた作家がいました。

一度じゃなくて、三度くらいですが、note を退会して投稿した記事をぜんぶ削除したことがあります。自分なりにのんびきならぬ事情があってやったことなのですけど。それはさておき、一瞬のうちに全記事が消えます。あっけないですよ。頭も空白になります。二、三日は魂が抜けたようにぼーっとしていました。

後味が悪いだけでなく、悲しいのです。自分の書いた言葉たちが消えるということは人にとって大きな喪失感をともなう出来事であり、個人的には事件かもしれません。

公開している記事を削除したいなら、全記事のバックアップを取っておくことをお勧めします。小心者の私のように。

*

私の書いた文章はどこへ行くのでしょうか？

そもそも私が note に来たのは、お墓をつくり直すためでした。十二年ほど前に一年間くらいかけてブログ記事をほぼ毎日書いていて、そのバックアップを電子書籍化し置いておいたサイトがありました。いわば私の書いた文章のお墓です。もう書かないつもりだったのです（じつのところ、十年間ほどは何も書いていませんでした）。

そのサイトを持つ会社が身売りすることになったので、あわててお墓を移そうとして、あちこち探して、ここにたどり着いたというわけです。そして過去のブログ記事を再投稿しながら新しいお墓をつくっているうちに、書き下ろしの記事も投稿するようになり

ました。

それにしても、ネット上の「お墓」は永久にあるものではないと、その当時は痛感しました。ここはどうなのでしょう？　ちゃんとバックアップを取っておいて、PCのハードディスク内とか、USBメモリーで手元供養も同時にしておけば安心かもしれません。でも誰が読むのでしょうか。

＊

私たちの書いた言葉たちはどこに行くのでしょうか？

言葉は借り物です。誰もが生まれたときに、すでに言葉があり、それを借りてつかっているわけです。借りたといっても、ふつうは返す必要はありません。

自分の書いた言葉がどこかの誰かに、移ったり、写ったり、映ったりして、誰かの中でその人の言葉になる。こんなことがあれば素晴らしいですね。比喩的な意味での結合とか結婚みたいじゃありませんか。顰蹙を買いそうですが、愛のいとなみを連想してしまいます。

＊

あなたや私やみんなの書いた言葉たちはどこへ行くのでしょうか？

私の書いたこの記事があなたの端末の画面に映っているさまを、いま想像しています。

それもいつか消えるのでしょうか、消えればきっと宇宙のどこかでぷかぷか浮いている。あなたの書いた言葉たちといっしょに浮いている。みんなの書いた言葉たちといっしょにぷかぷかふわふわ。そんなさまを思いえがいています。

正方形と長方形で悩む夜

＊

印象やイメージの話ですが、長方形や直方体は親しみやすくカジュアルに感じられ、正方形や立方体は正式というか格式張って感じられて身構える自分がいます。

そもそも角（かど・かく）があるものは人がつくったから、そうなっている気がしません。測りやすく細工がしやすいのではないのでしょうか。

家屋や建物一般が直線と四角で成りたっているのも、測りやすかったり、作業がしやすかったり、運びやすいからでしょう。建設とか建造とはそうした行為の繰り返えしであり組み合わせなのかもしれない。そんなふう to 想像します。

うまくできているのですね。素人がひとりで勝手に納得。

＊

四角四面なんて言い方は正方形を意識している気がします。英語で正方形を意味する square には堅物という語義もあります。立方体の箱をかかえて電車の席についている人を見ると、その中身がすごく気になります。まして白だったりすると……。赤と白と混じった箱なら笑みが浮かびそうです。

包装された直方体の箱をもらったと想像してみてください。文庫本くらいの大きさです。ふつうにわくわくしませんか？ ふつうにうれしくありませんか？ これがもう少し小さめの立方体の箱だったらどうでしょう？ 「何だろう？」と身構えてしまいませんか？ ちょっと怖い気もしませんか？ すごく高価なものではないかと期待するかもしれません。

いずれにせよ、立方体だと大切なものが入っているようで緊張感が漂います。長方形や直方体は手や腕でかかえるのには持ち運びやすいですが、正方形や立方体は個人的に

はやや持ちにくい気がします。この形の荷物を運ぶ人は大変でしょう。形は整ってきれいですが、人の体にはなじまない形状なのかもしれません。

たとえば、近所の道を歩いていて、宅配便の業者さんが立方体の箱を胸のあたりでかかえていたとします。二度見しませんか？あるいは、ピンポンとあなたの家のドアチャイムが鳴って、そこに立っている宅配便会社のお兄さんが立方体の箱を手にしていたとします。家族に届いた荷物なので、あなたは中身が分かりません。伝票に印鑑を押す、またはサインするときの手が小刻みに震えませんか？

＊

あと、これまた個人的な意見で恐縮ですが、立方体の部屋は落ち着きません。縦横そして高さが同じ長さの部屋にいる自分を想像すると緊張感を覚えます。長時間いれば精神的におかしくなるのではないかとさえ思います。

古いお寺や社（やしろ）にほぼ立方体のものがあつた記憶がありますが、いかにも厳めしいし、中には絶対に入れないとか、見てはいけないものが入っているように考えてしまいます。そうそう、御神輿（おみこし）の豪華な屋根を取ると立方体っぽくないですか。いまでは見かけませんが、井戸も正方形だった記憶があります。そもそも「井」の字がそうですね。

もし立方体の建物があつたとしたら、きっと敷居はまたぎにくいだろうなあと思像します。直方体の建物なら気楽に入っていける気がします。

＊

なんと言っても部屋は、立方体をほどよく直方体にした感じがいちばん落ち着くのではないのでしょうか。長細すぎる部屋だと廊下みたいで違和感を覚えるにちがいありません。要するに、床と天井と壁が適度に長方形の部屋のほうがしっくりくるし、居心地がいいのだらうと思います。げんに、いま私がいる居間がそうです。

この部屋は和室なのですが、引き戸も長方形、サッシの窓も長方形、あと壁のカレンダーも、テレビとそのリモコンも、テーブルも、パソコンの画面も、ティッシュの箱も、本も新聞も棚も枠に収めた写真も、ぜんぶ長方形です。あ、畳を忘れていました。目に

つく正方形は座布団とカーペットくらいです。

寝るためにつかっている部屋もそうです。ベッド、シーツ、布団、枕、エアコン、エアコンのコントローラー、たんす。そして天井の羽目板が長四角です。夜は小さな電球の明かりのもとで寝ているのですが、目を開けると眼鏡を外した目にぼんやりとその羽目板の様子が目に見えて安心します。見慣れているからでしょう。

いま私の寝る部屋は亡くなった母の寝室でした。最期の母は長方形の枠から立方体に収められ、つぎに立方体に収められて帰ってきました。その立方体の中の母は球体だとイメージしています。その球体もまた器なのだと思います。人はなんらかの器に収まっているという意味です。そう考えると安心します。

こんなとりとめのないことを考えながら夜を過ごし、眠りにつこうと努めるのが日課になっています。

あ、そういえば、夢の中では長方形とか正方形とか円形とかを意識したことがない気がします。いや、どうなのでしょう。よく覚えていません。いったん考えだすと気になります。このあいだは、自分の夢に文字が出てこないという発見があって興奮したばかりなのです。なんだかワクワクしてきました。今夜は夢を見るのが楽しみで眠れないかもしれません。

あやしい動きをするもの

＊

U F Oは空を飛ぶわけの分からないものを指しますが、昔は「空飛ぶ円盤」とも呼ばれていました。でも、円盤状だけでなくいろいろな形状のものがあったみたいで——葉巻型なんてあった気もします——いまではU F O（未確認飛行物体）という言い方が定着しているようです。

みなさんは、どんな形の物が空を飛んでいけば不気味に感じますか？　いかにも定番っぽい円盤状、火の玉みたいな球状、あるいは葉巻とかウィンナーみたいな形、立方体、直方体、昇り龍や蛸やネズミみたいに生き物っぽい形——いろいろ考えられますね。

私は丸かったり球状のものには洗練を感じます。形として見事で美しいのです。あと、丸いものは広がるというか拡散する気がしてなりません。無限に大きくなっていくのではないかという怖さも感じます。固体や液体よりも気体をイメージしているのかもしれない。

長方形や立方体だと職人的な完成度を感じて、こんなのが空を飛んでいたら手強い気がします。人工的というか作為を感じるのです。長方形や楕円形だと知的な生物がつくって操縦しているのではないかと考えてしまい、やはり恐ろしいです。とはいえ、なにぶんにも、U F Oらしきものを見たことがないので、空想はしますが現実味を覚えません。

＊

個人的には、形よりも動きに注目したいです。動きのほうがリアルに怖さをイメージできそうな気がします。そもそも、動きのない顔よりも動く表情、姿や格好よりも仕草や身振り、形体よりも動作のほうが生々しいし不気味じゃないですか？　動きは予想がつかなくて不安になります。

つまり、固定よりも変化を恐れるのです。なにしろ、変化（へんか）は「へんげ」とも読みます。ゲゲゲの鬼太郎みたいで、「げ」という濁音が不気味ではないですか？　七

変化（しちへんげ）の変化ですし、語呂から変幻自在（へんげんじざい）を連想するの
かもしれません。こういうことって大切です。

「みなさんは、どんな形の物が空を飛んでいけば不気味に感じますか？」に話をもどし
ます。

直線で落下するように動けば、隕石の可能性があり得体が知れて安心するかもしれま
せん（落ちるのが自分のいるところでなければ、ですけど）。つまり素直なのです。直線
で水平に動けば何かが乗っている可能性を感じて恐ろしいです。でも飛行機かもしれな
いと考えたら安心しますね。ミサイルの可能性もありますが、もしミサイルならまわり
が大騒ぎしているはずだと考えそうです。

ふわふわ——こんなのが飛んでいけば妖しいです。見たことはありませんが、火の玉
を連想します。ただ人魂だと思えば、気心の知れた同士ですから、手を合わせてひたす
らお祈りをするだけで消えてくれそうな楽観と安心感があります。

いちばん怪しく妖しいのはジグザグです。これは不気味だし、マジで怖いんです。知性
や人間もどきっぽさや、感情を感じるからだと思います。感情は動きのなかでも、とく
に予測がつかなくて不安です。しかも人魂と異なり、話の通じなさそうな生き物とか生
命体めいていて怪しくて恐ろしいのです。中に乗っている「物」の姿まで勝手に頭に
浮かんで来て、鳥肌が立ちそうです。

ZIGZAG、zigzag、ジグザグ、じぐざぐ。字面と語呂があやしいですね。音と形が蛇の
形と動きを連想させるのかもしれません。蛇を敵として知覚する生き物は多そうですね。
もちろんヒトも。かたちそのものがうごきを思わせませす。

＊

動くというのは、あくまでも人間としての枠内で判断しているものかもしれません。
知覚に左右されるという意味です。

植物を考えてみてください。特殊なカメラと特殊な撮影法で——この「特殊な」って
テキトーな言葉で便利ですね、知らない複雑そうなものだったり、得体の知れないもの

はぜんぶ「特殊な」と形容すればいいのです、ニュースでよく出てきます——、数秒とか数分のあいだに、何か月、あるいは何年にもわたる動きや変化を映す動画があります。

ああいうので見ると、植物ってめちゃくちゃ動いているじゃないですか。ひゆるひゆる、によきによき、動きます。場所は移動しなくても、その動きはすごいです。あと、地殻運動を見える化した映像がありますが、あれも感動的です。日本列島やそこにある山脈やまわりのプレートがどのように形成されたかをCGかなにかで見せているわけですが、めちゃくちゃ動いていますね。

＊

動きって不思議です。というか、人には見えなかったり知覚できない動きがいっぱいあって、私たちはそれに気づいていないだけなのでしょうね。なんだがぞくぞくしてきました。あたりを見まわしています。よく考えると、身のまわりのすべてのものが移動してここにあるわけです。それに、いつまでもここにあるわけではありません。

「ここ」にある「これ」は、以前は「こう」ではなかったし、「どこか」にあったはずです。万物流転。万物動転。びっくり仰天。

はあ。ため息が漏れました。すべての物が長い目で見れば動いているのですね。目の前のペンや本やリップクリームが健気で愛おしく感じられます。みんな頑張っているんだね。

あ、自分もそうだと気づき、いまビビっています。というか、この部屋でいちばん動いているのは、この私じゃないですか。千鳥足で右往左往。たぶんジグザクを描いています。

ぜんぶ、わたしにまかせなさい

＊

「唯〇論」という言い方があります。ある特定のものごとや現象の特質をもちいて、森羅万象をひっくるめて面倒みようという考え方です。威勢がいいですね。欲深いとは言いませんが、志が高いと言わざるをえません。

試しに "唯 *論" でネット検索してみたところ、あるはあるは、そのヒット数の多さにびっくりしました。まず、以前に見聞きしたことのあるものを列挙します。

唯幻論＝唯心論＝唯物論＝唯臆論＝唯言論＝唯我論＝唯脳論＝唯神論＝唯金論.....

次に、初めて見たものの中で、特に印象的だった使用例を並べます。

唯ゲーム論＝唯 VR 論＝唯エネルギー論＝唯情報論＝唯退屈論＝唯創論＝唯遺伝子論.....

この言葉の羅列を見て感じるのは、「唯〇論」というのは、メタな立場、つまり「これですべてが解決や説明や解明できるぞ。大したものだろ」という視座に立ちたいという欲求です。

これまで見聞したところでは、メタな位置に立とうとするとメタメタになることは明らかですので、わざと上の言葉を全部「＝」で結びました。「すべての面倒をみる」というメタな心意気があれば、ほかの「唯〇論」と「＝」で結んでもいいことになります。

なにしろ「何でも面倒をみよう！ まかせとき！」というのですから。「＝」は権威のあるお墨付きの印であり、5つ星とか勲章みたいな「榮譽」のシンボルということになりませんか？

幻=心=物=臓=言=我=脳=神=金=ゲーム=VR=エネルギー=情報=退屈=創=遺伝子.....という「存在の偉大なる連鎖」が形作られると考えられます。やっぱり、「ぜんぶ、わたしに、まかせなさい！」状態です。

*

それにしても、すごく斬新かつ野心的な考え方ですね。思わず、占いを連想してしまいました。

星、タロット、トロッコ、水晶、ミラーボール、姓名、生年月日、茶柱、貝柱、おみくじ、恋するフォーチュンクッキー！、動物、植物、ミジンコ、鉱物、風水、噴水、筆跡、指紋、声紋、鼻紋、DNA、ハンコ、電子サイン、印鑑、きんかん、印章、印象、髪型、寝癖、寝言、歯ぎしり、歯型、歯列、黒子（ほくろ）、白子、明太子、色、エロ、亀の甲羅、コーラ、おかゆ、オートミール、夢、酄、靈感、性感、手相、人相、顔芸、骨相、家相、仮装、異装、鏡、餅、ひげ、はげ、まげ、しいたけ、さるのこしかけ、オーラ、おらしんのすけ.....。

「何でもあり」が「何でも占っちゃう」わけですから、「ぜんぶ、わたしにまかせなさい」の「唯〇論」と占いは、志の高さという点できわめてよく似ていると言えそうです。

2人のゲンちゃん

＊

ところで、唯〇論って、ありますね。で、思い出したのですが、唯幻論と唯言論とのあいだで論争があったとか、なかったとか、そんな話がありました。昔の話です。いわば、ゲンちゃんとゲンちゃんとの喧嘩です。

声に出せば、同じ「ゲンちゃん」なんだから、それに、両方とも結局は同じことなんだから、喧嘩はやめましょう。当時、そう思ったことも思い出しました。

ゲンちゃん同士の喧嘩がどういう内容だったかは忘れましたが、言と幻が材料なら、こんな話になりうるという横着な乗りで勝手に考えてみます。

＊

まず、「言は、物＝物質＝具体的」vs.「幻は、現象 or 意識＝こと＝抽象的」と図式的に処理しておきます。

蛇足とは思いますが、誤解を避けるために、申し添えますが、言＝言語＝言葉は、話し言葉＝音声＝空気の振動、書き言葉＝文字 or 活字＝刻んだり引っ搔いた跡 or インクのかすなど、という具体的な物質です。

したがって、知覚の対象になります。見たり鼓膜を振動させたり触ったりできない、意味やメッセージのことではありませんので、よろしくご理解とご了承をお願いいたします。なお、意味やメッセージは、むしろ幻さんの担当のようです。

ここで、視点＝支点という点を考慮しなければなりません。最初から、どちらかに加担＝支持＝配慮する形になっては、2人のゲンちゃんが、ひがんで腹を立てますので、公平にいきましょう。

「言から見れば＝言に重点を置けば、すべては言＝言語＝言葉である」となり、「幻から見れば＝幻に重点を置けば、すべては幻＝幻想＝まぼろしである」となります。

＊

で、言が、特権的＝メタな立場にある、根拠＝基盤＝背景＝理由として、ヒトは広義の言語＝言葉でしか関係を築けないし、言葉によってしか知を継承できないという説＝フィクション＝イメージ＝物語があります。

一方、幻が、特権的＝メタな立場にある、根拠＝基盤＝背景＝理由として、ヒトはしょせん本能が壊れた生き物なのだから「狂え！ 狂え！」という説＝フィクション＝イメージ＝物語があります。

さて、いま、上で並べた2つの文章ですが、同じことを言っています。意識的に＝故意に、同じことを言わせた、同じことを書いた、やらせた、出来レースだ、八百長だ、とも言えます。何とでも言えます。

いずれにせよ、両者が同じことを言っているというのが顕著にあらわれている個所は、「ヒトは広義の「言語＝言葉」でしか関係を築けない」＝「ヒトは本能が壊れた生き物だ」です。

ヒトにおける、言語の存在＝本能の壊れと単純化すると分かりやすいと思います。あとは、いわゆる、「卵が先か、にわとりが先か」の問題ですが、「言語の存在＝本能の壊れ」のどちらが先かは検証も実証もできないし、結論も出ない点は大切だと思います。

2人のゲンちゃんをめぐる喧嘩の仲裁は、以上です。

＊

“唯*論”でネット検索してみると、たくさんの唯○論があります。その中で以前に聞いたか見たことがあるものを個別に見てみたのですが、仮想敵があるのではないかと感じられる唯○論が多いようです。

唯○論対唯△論とは限りませんが、何かを敵（かたき）にして論を張っているという感じで、ほのめかしや当てこすりが透けて見えるのです。さらに興味深いのは、その仮想敵と推測できる「何らかの論」と、その論がよく似ていたり、ほぼ同じではないかと感じられることです。

「唯」という大げさな言葉をつかいながら、意外と局所的な不満や批判ややっかみ、あるいは近親憎悪から生まれているのではないかと感じました。今回の2人のゲンちゃんの喧嘩も、そうした文脈で読めそうです。

あえて「何か」を決める、あえて「何か」を決め
ない

＊

ものを書いている人なら、誰もが「何か」でありたいし、「何か」を書きたいのではないのでしょうか。ただし、すでに誰もが「誰か」であると知っている有名人は別です。

有名人とは、自分の名前が「何か」であり、その名前で読まれ、さらにはその名前で売ることができる人だと言えるでしょう。

この文章は、私をふくめ無名である人のために書いています。

＊

あえて「何か」を決めて書くことはふつう強みになります。

「私は小説を書くのだ」、「わたしは詩を書きます」、「おれはポエムだな」、「僕はミステリーに命を懸けている」、「目指すのは純文学、なかでも私小説です」、「なんと言ってもエッセイよ」、「エッセイと言うよりもコラムかな」

何でもいいのです。「何か」を書く場合に、その「何か」が「何」なのかを決めることで、パワーが生まれます。ジャンルという名前の力は大きいです。名前の力は最強と言っても過言ではありません。

人であるかぎり、誰も名前には勝てないでしょう。名前を利用しない手はありません。

＊

あえて「何か」を決めないで書くという姿勢もあります。私はそれに近いです。そんな私は、とりあえず緩い「何か」を決めて、とりあえず緩い「何か」を自称します。

この緩い「何か」は決めていないに等しいものである必要があります。それが、たとえば後述する緩いジャンルのハッシュタグです。

無名の書き手にとってネット上で「名無しの権兵衛」でいることは、ぜんぜん読まれないことになります。げんにそういう姿勢でいる人たちがいます。その覚悟はすごいと思います。

強い意志の力を感じます。もちろん、ごく自然に、そういう態度で書いているように見える人もいます。人それぞれです。

私は無名であっても読まれたい派ですから、とりあえずハッシュタグを付けます。緩いジャンルである「エッセイ」、「随想」、「散文」をよくつかいますが、それは曖昧で漠然としているからです。そうした緩く曖昧なジャンルには強い縛りが無いのがいちばんいいところです。

*

定型詩（たとえば俳句や短歌など）は縛りとルールがありますね。自由奔放に書いていては定型ではなくなります。縛りの強いジャンルを「何か」として決めると、心強いと思います。仲間もたくさんいます。

「私は俳句を詠む」「わたしが書いているのは短歌です」

じつに明快です。

「私は我流の俳句を詠む」「わたしが書いているのは自由律短歌です」

これまた素晴らしい選択だと思います。

*

ジャンルとはレッテルであり看板やブランドでもあります。要するに、名前です。人が名づけるときには、名前が絶対的に不足します。誰もが、その名前を自称したり他称するからです。

そのため、あるジャンルでは新名称をつくらないかぎり、名前の争奪戦が起こります。これは人間関係の問題として立ちあらわれます。

「私が書いているのが詩なの」、「いや、俺の書いているのが詩だ」、「ちがうちがう、〇さんが書いているのが本当の詩」、「あれは詩ではないって、△くんの書いているのが真正銘の詩だよ」

詩という名前の争奪戦です。小説でもミステリーでも俳句でも現代詩でもポエムでも起こりえます。名前は縄張りや領土でもあるのです。土地は不足します。どこでも土地をめぐる争いが絶えないですね。

〇〇詩、△△詩、XX派、ZZ主義。

*

こういうぐちゃぐちゃした人間関係が苦手な人は、縛りの弱い、あるいは縛りのほとんどないジャンルを「何か」にしましょう。

「文章」や「言葉」や「作文」をお薦めします。いや、これは冗談ではなく、私も以前つかっていた「何か」です。

また元気が出てきたら、別のややきつめの縛りのある「何か」に変えるのもいいかもしれません。

ただし、「何も決めないでいる」と、逆にめちゃくちゃしんどいですから、気をつけましょう。疲れているときには「何も書かない」という選択肢もあります。

*

ところで、ノンジャンル、無所属、反レッテル、無印、アンチ名前派、何と名乗っても、それは名前になります。名前の力は最強だと言っても過言ではありません。

そうであれば、やっぱり「何か」でいいじゃないですか。「何か」も名前ですが、誰も気にしない名前です。名前界の「穴」かもしれません。

あえて「何か」を決める、あえて「何か」を決めない、とりあえず「何か」を決める、とりあえず「何か」を決めない、「何か」を決めても誰にも言わないでおく。

何でもいいです。好きなものを書きましょう。そうすれば「何か」がぜったいに書けます。その結果として書けた「何か」が「何か」なのかは他人が決めるのでしょうか、書いた者勝ちです。

ペンを動かしましょう。キーボードを叩きましょう。あなたの「何か」のために。それは、たぶん、あなたの中の「何か」のためなのです。

疲れたときには、何も決めないでいる、あるいは何も書かない。これも大切ですね。

3人のゲンちゃん

＊

ところで、唯〇論って、ありますね。で、思い出したのですが、唯幻論と唯言論とのあいだで論争があったとか、なかったとか、そんな話がありました。昔の話です。いわば、ゲンちゃんとゲンちゃんとの喧嘩です。

みなさん、ここで、この記事のタイトルをご覧ください。「3人のゲンちゃん」となっています。そうです、ゲンちゃんは、もう1人いるのです。ひょっとすると、もっといるかもしれませんが、3人にとどめておきます。

では、ご紹介いたします。「唯現論のゲンちゃん」です。“唯現論”でネット検索すると、複数のゲンちゃんがヒットしますが、そのご使用中のゲンちゃんのごことは存じません。世の中には、同名のヒトがたくさんいます。

ここでの、ゲンちゃんは、「げん・現・現実・事実・うつつ」という連鎖を信奉していき、言と「幻」にならってフレーズ化しますと、「現から見れば＝現に重点を置けば、すべては現＝現実＝「今、現に在る事実・状態」である」となります。

また、現が、特権的＝メタな立場にある、根拠＝基盤＝背景＝理由として、ヒトは現実に「現在する＝現に存在する」事象以外を認識できないという説＝フィクション＝イメージ＝物語がある、ともなります。

＊

で、この現ちゃんの見解ですが、言ちゃんと幻ちゃんの言っていることが同じなのと同じく、同じことを言っています。いちばん大切だと思われる「ヒトは広義の「言語＝言葉」でしか関係を築けない」＝「ヒトは本能が壊れた生き物だ」＝「ヒトは現実に「現在する＝現に存在する」事象以外を認識できない」という部分が同じことを言っています。

さらに単純化すると、「言語の存在＝本能の壊れ＝現実の認識」は同義です。

「どこが同じなんだ?」「なぜ同義なんだ?」と疑問をいただいている方のために説明しますと、3人のゲンちゃんは、「ヒトには、知覚、および、認識の両面において、限界＝欠陥がある」、言い換えると、「ヒトは、全知全能ではない。＝ヒトには、出来ないことと、分からないことがたくさんある」、あるいは「ヒトは、この惑星に生息する一介の生き物にしかならない」と認めている点で、同じだという意味です。

決定的に、同じなのは、

*唯言論＝唯幻論＝唯現論が、どれも「ゆいげんろん」と読める。＝3人とも、「ゲンちゃん」だ

という点です。というのは、もちろん冗談でして、そうではなくて、

*唯言論＝唯幻論＝唯現論が、どれも「唯〇論」である。
＝3者とも、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」と言っている。
＝できもしないことを言っている。
＝夢を語っている。
＝希望を述べている

という点が同じです。蛇足ですが、

*すべてを「げん」に還元（かんげん）する（※「還元主義＝ reductionism」の「還元」です）。
＝すべてを「げん」で説明する

ことはできません。なぜなら、

*たった今、記述した立場＝考え方は、言＝言語だからであり、幻＝幻想だからであり、現＝現実だからである

からです。

*問題は、「唯」と「すべて」にある。

と言えます。

*「唯」と「すべて」は、肯定に見える＝思えるが、実際には否定である。「唯」と「す

べて」という言葉＝イメージで、何かを特権化する＝メタな立場に置く＝上位に置くという作業を行ったとたんに、ヒトは不可能性に直面している＝もてあそばれている

という事態に陥ることを、忘れてはならないと思います。早い話が、

*「唯」と「すべて」という言葉＝イメージは、「ヒトにとって荷が重すぎる」＝「ヒトには扱えない」

ということです。

*

ここで飛躍しますが、だからこそ、

*ヒトは、必死で記述する。＝記述するしか方法がない。＝記述することで自らの「無力＝無能＝敗北」を認めている。

のです。

万が一、ヒトが全能に近い存在であれば、記述などという、まどろこしい＝ほぼ愚かな作業に、没頭＝熱中しない、とも言えます。ヒトが血道を上げている

*記述とは、既述であり、奇術もしくは詭術でもある。

なんてなかなか言えていますよね。

したがって、メタな立場にたつ＝この惑星の王者を気取るなんて、10年早いどころか、100万年早いと言ったとしても、言い過ぎ or 言い足りない、と言えそうです。

*

とはいうものの、3人のゲンちゃんは全知全能でなく、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」という立場には全然ないにもかかわらず、それなりに有効性＝効果＝影響力を備えていて、ヒトびとのためになっていることは確かです。

誰がいちばん偉いかなんて考えることはありません。それぞれの活躍の場はあるわけ

です。

それはさておき、現実問題として、要は、ヒトは生きていくうえで、自分にとって「気持ちいい=快である」ゲンちゃんと付き合えばいい、のです。ただし、

* 「唯〇論」の、「唯」は外しましょう。「〇論」だけで、いいじゃありませんか。

そうすれば、唯言論、唯幻論、唯現論、が全部、「げんろん」となります。「げんろんの自由」は保障されています（※公平を期するために、あえて「言論の自由」とは記述しませんでした。気遣いと気配りが何よりも大切でございます）。

自分の中にある「何か」のために書く

＊

人はなんで書くのでしょうか。私には大きな謎です。気になって仕方がないので、それを考えながら、この文章を書いています。書かずにはいられないのです。これを書かないと、つぎの文章が書けない気がするのです。

＊

ものを書いている人なら、誰もが「何か」でありたいし、「何か」を書きたいのではないのでしょうか。その「何か」は人それぞれですから、自分の好きな、あるいは信じている「何か」を意識したり目指すのだろうと考えられます。

でも、なんで書くのでしょうか。

それがわからないから書く。これもありだと思いますし、げんにそういう気持ちで書いているらしき人がいます。

＊

私はといえば、たぶん、自分の中にある「何か」のために書くのだという気がします。それは自分にしかわからないというよりも、自分にもわからない予感があります。

誰もが「何か」でありたいし、「何か」を書きたいのではないのでしょうか——この「何か」でありたいの「何か」も、「何か」を書きたいの「何か」も、外から来るものです。借り物なのです。

たとえば、作家や詩人という名称も、小説や詩というジャンルも——あるいは、たんに書き手やユーザーであったり、たんに作品や記事であったとしても——、それは誰にとっても生まれたときにすでにあった「外」なのです。だから、借りるしかありません。

自分のものではなく占有できないという意味です。言葉と似ています。いや、まさに言葉なのでしょう。

その外から来る「何か」を、自分の中にある「何か」が迎えるのではないのでしょうか。迎え入れ、ひょっとすると迎え撃つのかもかもしれません。自分の中にあっても、その「何か」はふつうは不明だという気がします。何なのかわからないのです。心や魂に似ています。たぶん、それなのでしょう。

書いてみないとわからない。書いた結果、書けたものを見てもわからないかもしれません。内容はどうであっても、何かが書ければ書いたという達成感はあるにちがいません。

とにかく書いてみないとわからない。書いた者勝ち。

*

なんで、書くのでしょうか。

お金のために書く。これはシンプルな目的です。

私が note に来たときには、ここはふつうのブログだと思っていました。いるうちになんだか変わったところだなあと感じ、note の大きな特徴に有料公開があり、サポートという機能があると気づくようになりましたが、いまも無縁でいます。

メモ、防備録、手記、印象記、草稿、草案、小論文、短いエッセイ、短い手紙、記号、音符、メロディー、手形、紙幣。

これは英和辞典にあった note の語義ですが、note とは絶妙なネーミングだと感心します。要するに、何のために、何を書いてもいいのですね。

*

なんで、書くのでしょうか。

書きたいから書く。これはわかります。難しい理屈ぬきで書きたいのです。

表現欲という言葉に置き換えることもできるでしょうが、そういう抽象的な言葉と無縁な気持ちで書きつづけている人が多いようです。

なぜか、わからないけど書いている。なんとなく書いている。これもまたよくわかります。

皮肉ではなく、これがある人は強いと思います。

＊

承認欲求。これもわかります。

おならと同じで、誰にでもある現象です。この欲求がないとこの言葉は吐けないという意味です。おならも、うんちも、おしっこもしないのはアイドルだけです。

冗談はさておき、自分の中にある承認欲求の存在を素直に認め、逆にそれを利用して書く行為に結びつけるのが賢明ではないかと考えています。

＊

人はなんで書くのでしょうか。

そんなことに悩まずに書け。そんな声が聞こえた気がしたので、とにかく書くことにします。

自分の中にある「何か」のために書く——。さっき書いたこの文が他人の言葉に見えてきました。じつは、そうなのかもしれません。もとはといえば、外から来たのでしょうか。借り物なのです。

一度吐き出す必要があったみたいですね。入ったものは出る。じつに明快。ある種の生理現象だったのかもしれませんが。くしゃみや鼻水やため息と同じです。

すっきりしました。宿題を提出した気分です。一休みしてから、つぎの「何か」を書こうと思います。

うつせみのあなたに 短文集 その4

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
